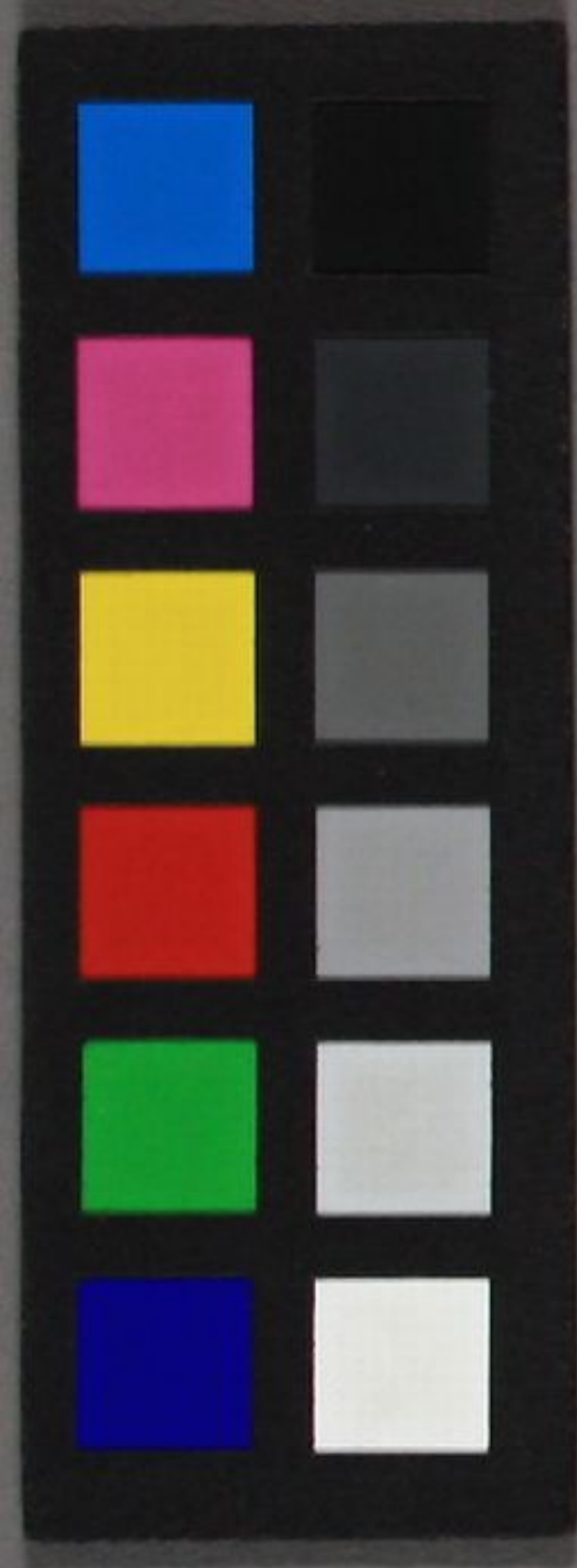


座古愛子著

伏屋の曙

東京 警言社書店



伏屋の曙

座古愛子著



座古愛子著

伏屋の曙

東京 警醒社書店



世の荒波にもまれ

離小島にさすらへる

姉妹方の友として

拙なき此小冊子を

捧げはべる

座古あい子

序文

三千年の往昔、以賽亞基督の性情を預言して曰く、彼は悲哀の人にして、
 病患を知りぬど。人生は一方より観ずれば、實に涙の谷なり。人生を愛せ
 る基督の如き慈眼愛腸を以てして、人生を見給ふ時に、如何で悲哀な
 らん、果た涙なからんや。吾人亦た基督の心を以て、人生を思ふ時に、涙な
 きを得ざるなり、殊に世に知られず、人に識られず、薄命不遇のうち、涙
 を啜る者に至つては、世の尤も同情すべきものなりとす。座古あい子の
 如きは蓋し其一人なりき。

あい子は、幼にして孤兒となり、身の薄命をかこち、人情の冷酷に泣き、病
 患の骨を刻む苦痛に九腸を絞り、哀痛の極、厭世の念に驅られ、幾度か死
 せんと企てたるものなり。然るに、一朝博愛仁俠なる奥江清之助君の發
 見する所となり、神の誘育を辱ふして、靈眼茲に開け、仰いで天日を拜

するに至り、常暗の幕は破れて、あい子が眼界の水平線上に、朝嗽灼
として耀くに至り、希望躍り、喜悦生じ、あい子の胸底未だ嘗て知らざる
生命の氣の躍如たるを感ずるに至れり。身は病床に臥すも、微笑を含ん
で、人生の苦難と戦ふのチャムピオンとはなれり。

イスラエルの詩聖之を歌ふて云ひぬ、「かれらは涙の谷をすぐれども其
處を多くの泉あるところとなす」と、赤貧なるあい子のむさくるしき枕
邊は、天架ける階段を夢視たる、ヤコブの石の枕のその如く、神に咫尺
する聖壇とはなれり。

予はあい子の病床を訪ふて、その談話を聴きつゝ、肅然自省敬虔の念に
充さるゝ事多し、天來の聖氣、あい子を通じて、人界に波濤をうつことあ
ればなり。又常に動かさるゝものは、あい子の全情深き心情なりとす。
寒き夜は野に臥す人や如何ならん

あつきふすまに我は眠れは

とは、あい子が、霜夜、湊河畔の橋下に臥すの人あるを聴て、詠めるものな
り。關東の一病友が、己が過去の悲惨なる來歴を詳記し來れるを讀みて
は、夜もすがら泣きあかせる事ありき。神戸市内の山手に當りて、年浦若
き令嬢が、あい子に似よりたる病患に、身は俯伏となり、首頸は振れて、痼
疾となり、晝夜苦悶せる病友ありしが、此病友を思ふて、耐へ難くなり、無
理なる工風を爲して、其病軀を距離隔たれる、病友の家運びてもらひ、
一夜を話しあかして、病友をして、感喜の涙に咽ばせたる事ありき。
此の如き行爲は、あい子が日々の課業なり、凡んぞ無意識に爲すあい子
の呼吸とも比せん、突抜井の水が岩底より噴出するが如く、作爲なく自
然に發するものにて、同情は、あい子の生命なり、呼吸なりとす。あい子は
生來無教育(僅々二年貧民夜學教育の恩惠を受けたる事あるもの)の貧孤

兒なり。水のバプテスマを受けて未だ十年の歲月を經過せず。従つて尙
は幼稚なる點多きに係らず、あい子の識力、殊に其品性が、月に年に雄進
靈化しつゝ、行くは驚くべき現象にして、蓋し斯生命あるが故ならん。
此書冊はもと、世の涙ある人に對する、あい子が靈界の光明に觸れたる
實驗の記なり、斯光明に就て、證明を爲さんが爲、著述されたるものなり。
予は近くあい子を目撃して、基督が爾曹は至高者の子なりと曰はれた
る語の眞意を味ひ、人の靈性は、開發すれば、神の風貌を活現すべき、尊貴
限なきものなるを疑ふ能はざるなり。
若し夫れ、此小冊子が、世の薄命不運なる人の子に、天よりの聲と、天來の
光明を傳ゆるを得ば、あい子に於て、如何ばかりの感謝なるらん。

兵庫基督教會牧師

武田 猪平 識

明治三十九年九月五日

我靈妹座古愛子恩寵錄を顯はさんごす、余は聊か知る
所を聖書によりて讀者の參考に供せんごす、二十一歳
の時救ひの光明その心に輝入染にし迄の彼は、路加傳
十六章の富める家の門に置かれたるラザロよりも一
層哀れなる有様なりしなり、然るに正直なる恩愛深き
老父の赤心は天父の御恩恵を呼び降し、暗夜を照らす
救ひの曙光を見こめしより、信仰の道を辿り其後の彼
は一變して恰もアブラハムの懷にあるラザロの如く、
人々の羨やまるる程に至りしを思へば、馬太傳五章の
主の御教への心の貧しき者は福なり天國は其人のも

のなればなり、哀しむ者は福なり其人は安慰を得べければなり、こは、此事ならん、嗚呼感謝すべき哉、神は我等が惱める時のいと近き助にたまはせり、實に今日の彼の幸福は世の彼を知る者の認むる所なり、然れども同情ある兄弟方よ彼の靈肉の爲に祈り給へ、彼は今尙病床の人、又我等立てりと思ふ者は倒れざる様慎まざるべからず、アロンモーセも途中に亡びソロモン晩年罪を得たり、謙遜にして絶えず祈らざるべからず、神よ我等の弱きを助け給へアーメン。

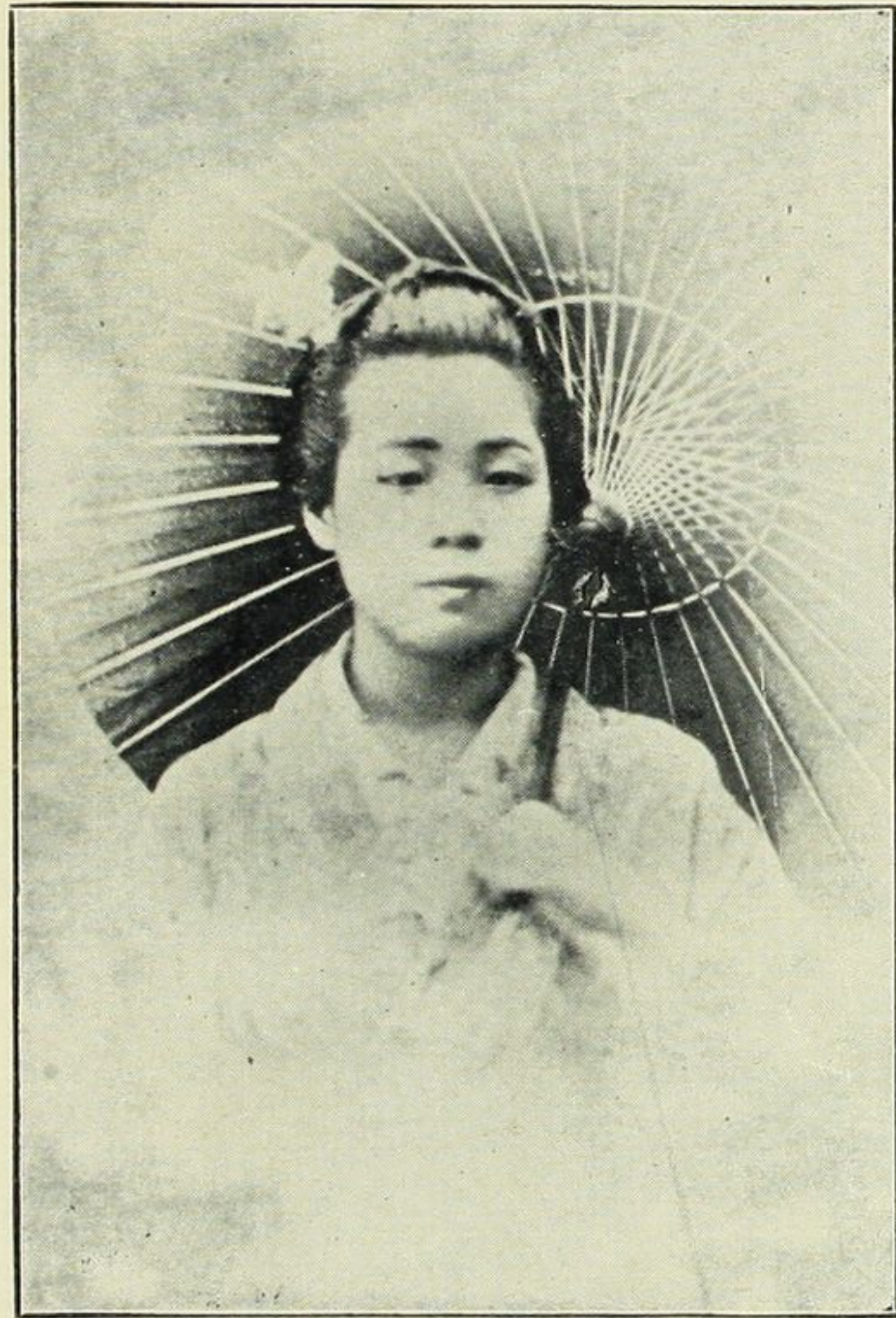
明治三十九年六月

山陰にて

奥江清之助

六

拜啓主の聖掌の中に愈御清福に在らせられ候段奉祝賀候諸愛姉が御病床においてものせられたる伏屋の曙を閲讀いたし感慨不斜轉た攝理の妙へなる事を感じ謝するご同時に愛姉の實驗せられたる信仰の能力の絶大なる事を確認致し誠に實驗に基ける確信は吾儕の生命に御座候間此書によりて靈界の妙諦を悟得するもの多大なるべしご豫期致候回顧すれば予が神戸多聞教會在任中同教會有志者ご共に新田夜學會を開きし際中に一少女の來學せしものありしが思ひきや是ぞ今日の座古あい姉を産み出ださんごは嗚呼是を



著者六十歳の夏撮影

座古愛姉
侍史

長田時行

思ひ彼を思へば全能者は確かに愛姉をして神の榮光
を現はさしめんこの聖旨なるぞかし冀くば愛姉の餘
生に彌増神の祝福加はらん事を祈上候
右は序文に代へ聊か所感の一節を記し置申候不宣
明治三十九年八月三十日大阪に於て

吟
以女世
成
伏屋了
也

十
い
り

朝晴くいふせき

綾の伏屋了も

矢々々のひるま

字らさか

河草をれ

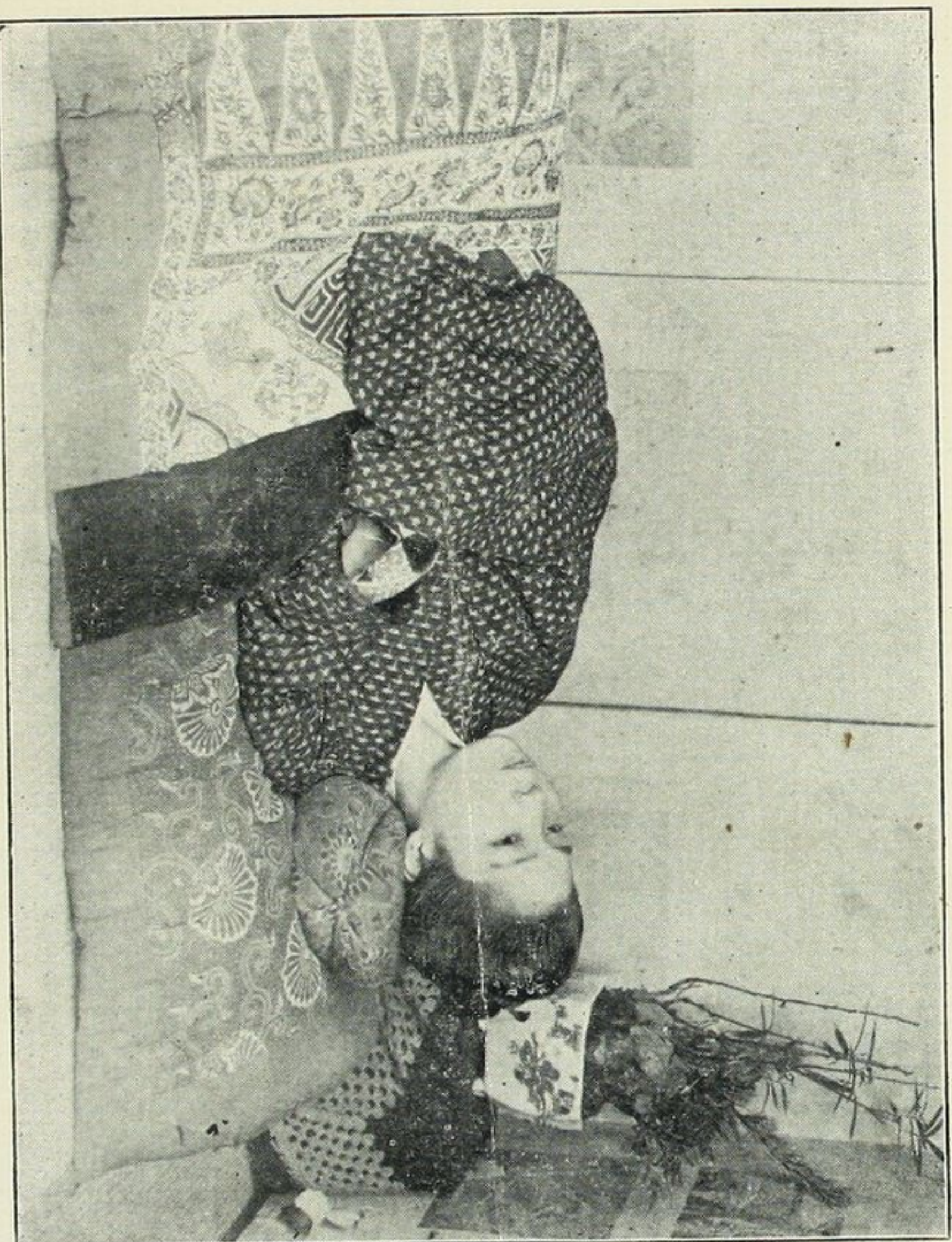
朝晴くいふせき

残の伏屋了も

欠くまのひるを

字らと書

河草をた



明治九年春病に撮影

目次

第一章	暗潮
第二章	うたかた
第三章	干汐
第四章	逆捲く浪
第五章	流れ藻
第六章	烏婆玉
第七章	救ひの舟
第八章	新生涯
第九章	樂しき數々
第十章	潮の光

まだ見ぬ父	乳離れ	盲目の祖母	一			
落水	麻疹	火災	五			
學家臥病	病餘の勞働	わが夜學會時代	九			
祖母の死	實母の死	弟の死	家の明渡	一九		
工場通ひ	初奉公	大阪にての蹉跌	姫路にての失敗	岡山に於ける災禍	二七	
最後の運命	病魔襲來	西宮にての失敗	大阪に於ける流浪	一家の諍	斬髮	五〇
一點の光明	義人の厚恩	聖徒の慰藉	悔	改	六四	
受洗	文字書く業	幸福なる妾	七四			
雨の如き同情	再び恩人に見ゆ	宮まうで	八一			
十三年ぶりに恩師に會す						
わが苦痛とわが感謝	靈夢	將來の希望	八八			
讚歌						

伏屋の曙

座古愛子

自ら筆とりて拙なき我經歷を語り出るは、まだ世に若き身のをこがましき事なれど、如何なる者をも救はで置き給はぬ神の恵み、キリストの愛によりて發する感恩の情もだすに忍びずしてかく書きつゝるなり、あはれこれを讀ませ給ふ兄妹たちよ希くは心して神のみ恵のあるところを深く知り給はん事を

第一章 暗潮 まだ見ぬ父―乳離れ―盲目の祖母

妾が生れたるは明治十一年十二月の末の方にして、神戸の地もまだ開けざる時なれば、今こそ東川崎町と云へば多少賑はしき街なれど其

頃まはたゞ新田しんでんと稱なづふる淋しみしき濱はまなりしが、このあたりの貧ましき割長家わりながやに呱呱こゝろの聲こゑを揚あげたるなり。耻はづかしき事ことなれど吾父わがちちはかねて身持みもちあしく遂つひに母ははとも別わかれてさすらひ居ゐるにより、母は五才ごさいになるわが兄あにをおのが老母らうぼに托たくして乳母うは奉公ほうこうをなしたるが其主家しゅけは鹿兒島かぎしまの人ひとなりければ遂つひに母は其子こと老母らうぼとを殘のこしてかの地に赴まゐりて事こととなり三年さんねんの間あひだかしてより給料きふれうを老母らうぼのもとへ送おくり越こしぬ。

祖母そぼは屑買くづかひの業わざを營いみ居ゐたるにて其頃裏町そのころうらてふと云いへりし(現今兵庫へいご西出町にしでまち)とてころの大澤おほさわ醫師いしの夫人ふじんに熱心ねつしんなる基督きりす信者しんじやの方かたありしが、商あきなひに行く時とき毎ごとに神様かみさまの事ことをきかされ心動こころうごきて兵庫へいご教會けうかいに赴まゐりて遂つひに救すくひの道みちに入るを得えたるなり。

其後母そののちは鹿兒島かぎしまより歸かへり來きりしが、別わかれ居ゐれる夫をとこの身持みもちも直ただり居ゐたるにより既すでに子こもある中なかなればもとの如ごとく家に歸かへられよと切せつに勸すすむ

る人ひとあるまゝ、子故こゆゑにひかされてもどく縁えんを結むすび暫しばらく共ともに暮くらすうち又々またまた夫をとこは放蕩ほうたうを初はじめいかに諫いさめても其甲斐そのかひあらざるに再またび心こゝろを決けつして家いえを出でる事こととなりたるも、其頃既そのころに妾めかけを懷くわい妊いにんせる事ことなれば、前まへの如ごとく奉公ほうこうすることも叶かなはず、たゞ細こまき手業てわざの賃ちん仕事しごとに其日そのひ々々を送おくるのみなり。斯かくの如ごとく父ちちとは名なのみにて實じつはやもめの母ははより生うまれたる妾めかけなれば父ちちは如何いかなる人ひとか顔かほさへ知しらざるなり、母は妾めかけを子こに養やしなはんと云いひ呉くるゝ人ひとありしにもかゝはらず、恩愛おんあいの情じやうもて守もり育そだて給たまひ妾めかけも三歳さんさいともなりければ母はまた老母らうぼに妾めかけを預あづけ置おきて山手やまてなる縣立病けんりつびやう院いんへ看護人くわんごにんに傭やこはれ給料きふれうは老母らうぼへ送おくる事ことなりこれにて聊いさかは暮くらしよくなりたり。わが兄あには母ははより受うくる給料きふれうを受取うけとりにゆきて歸かへりには小供せうこの習ならひとていつも其頃流行そのころりゆうこうの玉たまころとて當あて物ものをする遊あそびに金子かねの幾分いくぶんを減へらして歸かへりたり。ある日例いつれの如ごとく金子かねを渡わたせしが何なにと

なく心にかゝるより母は跡よりつきゆきたるに果して其玉轉がしに
 うつゝなきさまなりしを見し母の心根は如何なりけん今より察して
 も胸痛き心地するなり妾其頃三つとは云へど年弱なれば満二才にも
 足らずされば祖母に迫りて母さんの乳が飲みたいと泣き出すに祖母
 も遂に持てあまし兄と妾とを携へてかの病院の裏門まで連れ行けば、
 小供の事とてもはや乳のことは打忘れ、あたりの石などを寄せ集めて餘
 念なく遊べる様を母は内にありて門の節穴より差し覗き、出で、抱き
 てもやりたき念は胸をつけと愁ひ逢ひては離るゝ時の歎きはいかな
 るべきかと聲を忍びて泣き給ひしとなり、こは其後母より聞き話なり。
 其後祖母と妾とは一時に眼病にかゝり、妾は程なく癒えたれど、祖母
 は遂に盲目となりて、不自由なる身に子を守り育つる辛勞の中ながら
 神を信じ居ませる幸には心に絶えず喜びと平安を以て樂しみ給ひけ

ん、妾を抱きては讚美を歌ひまた聖書のことを話し聞かせ給ふ、今も猶
 は記憶せる歌は『樂しき國は天にあり、聖者は榮えてかゝやく』云々と聖
 書の話しはエス様のお話し又ラザロの事蹟などなり、定めし祖母の心
 にては樂しき國なる天國を望み、世にありてはラザロの如く暮すとも
 厭ひ給はぬ覺悟にておはしけん

第一章 うたかた 落水―麻疹―火災

妾五つの歳母は妾と兄とを連れ子として只今の父がり嫁ぐ事とな
 りぬ、先方にも十一になる女の子あれど實子にはあらで他より養へる
 なり、されど父はいづれにも同じ様に愛しみ給ひ、わが母も亦た等しく
 はぐゝみて隔てなければ、近隣の人々も姉さんの方は顔も似てあなた
 の子の様ですが、妹さんは遠ふ様ななと、噂せらるゝ程なりき、かくて

母は老母をも呼び迎へ二人の連れ子さへあればおのが身も共に働きて夫の母上に養老金を裕かに送らねば義理が濟まずとて父の商ひに出で行かれしあどは一人して鷺百羽も飼ひ鶏の料理も覺えて鶏肉のとき賣りなご初むるに至りぬ。

わが家は其頃兵庫新川の浮橋を渡りたる魚市の前隣にありしが妾の六歳の時近隣の九歳になる友と共に前岸に繋ぎある小舟に乗りて遊び居たるに其子の舟をがぶりく動かせる故妾は恐ろしく舷にかりつきさはせぬものぞと云へば猶ほ面白がりてがぶつかす途端妾は倒しまに水中に落ち入りたり聲を出さんとすれば水を呑み息をつけば潮に咽び苦しさを云はん方なけれど小供ながら一念に何卒して這ひ上らんと水中に垂れたる綱を握り石垣に足は掛くれとすべりて上る能はざる折柄父母は其子の報せによりて一目散にかけ來り妾が頭

髪の少し見ゆるを便りに直ちに引き揚げ倒しまにして振りたれど水は出ず家に連れ歸り火燧に寝ねさせたるにまもなく水を吐き又幾度となく尿通じてさしも太鼓の如く張り切りたる水も悉く出で、幸ひに一命を拾ひたり。妾が陥まりたる時石垣の傍に釣りせし人ありたる様覺ふれど引き揚げられたる時は見えざりし、或は世に云ふかゝり合ひを恐れて避けたるにやあらん。さもあらばあれかく悪戯を爲したる子も早く家に報らせし故手遅れも無かりしなれば其子を咎むることとは爲す勿れと父も許したれば事なく濟みぬ。

先之祖母は母の姉方に行き、兄は奉公に出でたりしが、此事ありし翌年の冬妾は重き麻疹に罹り寝ね居れば天井が舞ふ如く高熱にて歩むことも立つことも能はねば、夜も日も母を離さず、或る夜も例の如く妾は母と奥の間に寝ね、父は商の爲め店にて三名程の人と四方八方の話

しを爲し居給ひしが、夜九時頃其一人表に出で、突然火事よ〜と叫ぶ、何處ぞと見ればすぐ隣りの納屋にて壁の透間も赫とばかり赤くなり居るに父の驚きは一方ならず、先づ何よりも小供を連れ出せと母に命じ妾は負はれて逃げ出し、母は夜具幾疊を兩手に引き摺り出し父は鶏七面鳥などを籠に入れたるまでにて何するいとまもなく猛烈なる火焔は見る〜我家を襲ひて燃え上る様小供ながらに恐ろしく齒の根も合はで顛へいたる折柄消防夫の曳々とポンプを引き来るあり、母はひた慌てに慌て、此處に小供が居りますと妾を取り除ける事には心づかたで兩手にポンプを押戻さんとするも逸りたる人々の何條聞くべき、アハヤ輓き去らんとするを手速く一人の男によりて救はれたれば聊かの疵もあらざりしかくて其夜は知るべの宅に一夜を明したれど只身一つのみをのがれしのみにて壹錢の貯へもなく、殊に出火の原

因は放火なりとて届けたれば少しも損害を償はしむる道なく、ありし家も望みも灰となりて消え失せ、富めるにもあらぬ身の悲しき境遇に陥りたる初めは此時よりとぞ覺えける。

第二章 干汐

學家臥病―病餘の勞働―わが夜學會時代

わが養父は元來憫み深きさがにして其後貧しきうちながら、親戚など身をもて便り来るものあらば、快よく家に入れていたはるをよき事に思ひてにや、たま〜友より借り來れる金子等をそと持と去られたることもあり、又ある時一人の乞食の小供の門に立ち居るを不憫に思ひ其身の上を聞けば、父母共に亡く餘義なく乞食になりたりと云ふに、惻隱の心堪へ難く、母に相談したるに母も亦かねて苦勞は知れる身なれば、父にすゝめ其子を宅におきて一人前に仕上げやるべしと云ひ

聞かせ、取敢えず物をたべさせ、衣物を縫ひ直して着せやり近所の湯屋
に連れ行きしに、湯屋のあるとは其子を見て「そは乞食の子ならずや、左
様の者を入浴せしめては他の客は厭ふべく、營業の妨になる故お断り
申す」と云ふに父は大に立腹し「これもひどしく人間なり、殊に今日より
我が引取りて育てんと思へるに餘りと云へば情を知らぬ人ならずや」
と攻むれば主人も道理に詰められて肯じたりとか、かくまで其子をい
たはりやる甲斐もなく、父母なしと云ひたりしは、偽にや其後乞食の男
が父なりと稱して其子を連れ行けりと近所の人がしらせ呉れたるに
父もはや詮なしとて捨ておかれたり、猶ほ其後も迷ひ子を留めて親
に渡したることもあり、又は捨てられし母を追ひ來れりと云ふ子を例
の如く哀に思ひ育つるうち又悪しき心を起して少からぬ迷惑を掛け
去りたる事幾回と云ふことを知らざりしが殊に一層困りしは明石よ

り貰ひありし養女の姉に當るもの來りて奉公口を尋ぬるを例の如く
宅にとゞめ置けるうち、虎列拉にかゝり一日のうちに敢なく死にたる
にあとは消毒やら隔離やらの騒動にて此上もなき迷惑を蒙りたりき。
しばしの程は平穩に暮して磯の町と云ふに相當の家ありければ其
處に移り鶏類をひさぐ傍ら二階にて客をもてなす事になり、三人ばか
りの手傳人をも使ひ相當繁昌したれば父母もよろこびてひたすら業
務大切に勵めるうち妾も九才になりぬ。然るに不運の手は再度もりか
へしてわが姉の圖らずも腸チブスに罹り、晝夜共に嚙言のみ語り容易
に回復せざるに又妾に傳染し、次で母も病み伏し、遂には父も亦倒るゝ
に至りぬかくて家業は休む費用は嵩む困難の絶頂とも云ふべきとき
何の不幸か、新田に隠居したる父方の祖母の凶報を傳へ來るに會ふ、報
知に來りし姉なる人も父の大病を見て如何共する能はず、父も亦夢現

の境にあり殊に病體重くして或は生命覺束なきまでに至りぬ。
 かくていさゝか以前に恢復したる母と姉は病後の衰弱にもかゝは
 らず誰一人働くものなく其日々の糧にも困る事なれば父と妾を病
 床におきて茶培じと云ふ實に慘憺なる仕事に赴く事となれり、幾分よ
 き妾は宅にありて介抱する程の事なれど、未だ全快せざる身にして曉
 まだ暗き頃より立出で夕方灯ももして歸り來ますを見る時は、目は落
 窪み唇は色なく、疲れの様再び見るに堪へ難き程なり、其幾らかの金も
 て米を買ひ夕餐を了りては明朝のこしらへをし給ふ其多忙なるさま
 は當時小供心にも氣の毒の思ひに堪へざりしなり。
 ある日二人の夜に入りても歸り來らざるに、父は心痛め不幸のなら
 ひとして又何か不幸の上塗りの出來たるにやあらむ其邊まで見にゆ
 かんとして踰跟めきながら漸く湊川の堤近くまで行けば母と姉との語

らひつゝ歸るに出合ひ大に喜び何故かく遅かりしぞと尋ねらるゝに
 今宵は夜延仕事ありて遅くなりましたとか云ひ給ひしなども猶ほ記
 臆に残れるなり、
 さる程に父の病も全快したれど、前の如き有様に家賃の滞りには
 諸道具一切を家主に引渡し猶ほ厳しくも家を明渡さねばならぬ事と
 なり追はるゝ如くにして東出町にうつり住みぬ。希望の曙光を見たる
 もまことにしばしにして今はた殆んど再び起ち難き様にまで沈淪し
 たり。其間只壯健に回復し給ひし父を便りにて、父の稼ぎを母も助けつ
 ゝ、姉と妾には常に女子の道を教ふとて、女大學を母手づから書き二人
 に學ばしめ給ひ妾も其書を半まで暗誦し得る様になりぬ。
 母は常々妾に申さるゝ様お前は父上様にお孝行致さねばなりま
 せぬ、生みの親より育ての親と申す事あり、妾とお前とのみか祖母様ま

でがお世話になれること故母も身も態も構はず働くべし、お前は只父上の仰せに反かぬ様又父上がよしや御無理をのたまひて諍ふことありとても母の肩身を持つ様な事はする勿れと云ひ聞かされ居たる故父が怒る様の事などありて或るは荒らかにもの言ふときなども妾は父に縋り母をゆるしてよと頼み母上が云ひわけの様なる事をせらるゝ時も母にももの云はさぬ様なだむるに父の心も和らぎ妾を愛でいつくしみ給ふにつけ母への腹立もうすらぐ様になりし事もありき。

其頃母は猶ほ姉上には宅にて縫物を教へ、妾には舞三味線の稽古にゆかしめ給ひしが妾は今一つ學校に往きたき念湧く如けれど、もとより貧しき中にてかく數々學び能ふべくもあらず、いかにせむと案じわづらふうち、幸ひ新田に夜學校あり何一つをも持ち行かず共貧しき家の子ならば親切に教へやらんとこの事を聞きたれば遂に友達の紹介

によりて其小供と共に赴き頼みたるに容易に許されて其夜より文字學ぶこととなりたり。わが住めるほどりは東出町の海軍省管轄地の前にして、湊川尻のお臺場の跡荒れはて我家の門前などは草茫々たる狐の巢なれば冬の夜頃は淋しき啼き聲をも聞き得るなり、されば小供心にいたく恐れ夜學會よりの歸りには、ひこる學び居る讚美歌を大聲に歌ひつゝ馳せかへりたり。

かゝる程に妾はいよゝゝ學ぶ事が面白くなり、父母より今宵はわけて厳しき寒氣なれば湊川を越えゆく事は嘸ぞつらからん、休ませて貰ふこそよけれど、の給ふはもとより子を思はずみ心なれど、只好む道なればそを辭みて其れでは試験に負けますからと無理に反きてゆけば、成績も相當にして先生もひとしほ愛でさせ給ひぬ。

此學校の先生は二十三四ばかりの多聞教會の信者にて愛の心深く

日頃妾が淋しき所より通へるを思ひやりて先生は歸るさはわざ／＼
妾を送り給ひて又もどの神戸に歸られし事もあり師弟の間は極めて
親しかりき、其先生の中の二人は下宿住ひにて晝はそれ／＼お仕事に
出勤し夜またかく教へらるゝ事なれば其骨折りやもと一方に非ず、こ
とに其頃は番人もなかりし故先生はとくより行きて自ら戸を開き火
鉢に火をこしらへ、又ランプに燈をともしかくて小供等の來るを待ち
給ふ也。

生徒の中に四十才ばかりの男一人學びに來れるありしが、先生は親
切に教へられ、小供と共に扱ひ難きふしもありてにや一人別にして其
人ひとり掛り居たまひし程なり。かくの如く全く我等貧しき者の爲
めにおのが身を捧げ給ふは己の如く人を愛せよとの聖言を實行せら
るゝにて信者なればこそ斯の如く長き月日を一日の如く千金にもま

さる寶なる文字を教へ給ふのみならず、猶ほ他にキリストのお話し、又
親孝行の話なども聞かしめ給ふに自ら小供の品行などもよく、燐寸工
場通ひの者等とは一段目立つに至りたり、されば夜學會に行かぬ小供
等が悪口を吐いてヤソの磔刑と手をひろげて眞似をしたり、石を投げ
て追ひかけたり又は「此處の鳴行社は貧民學校親の耻まで子がさらす」
など、口悪き歌をうたひて嘲けるなり。

この鳴行社と云ふは、燐寸商會の名にして、夜學會の生徒共は晝は其
工場に働きて親の助を爲し、夜は疲れたる身の睡さをこらへて學ぶこ
となれば先生も一しほいたはり給ふ、されど妾は父が燐寸工場に行か
しめ給はで、宅にて姉と共に燐寸箱を張る丈けなれば他の人々に比し
ては尤も働さ少きものなりし。

一日先生のお休みの日に妾は外七人ばかりと連れ立ちて先生の

宅を訪ひたるに大に喜ばれ菓子を買ひ來りてもてなされ、さま／＼面白き遊戯を始め、先生も亦小供の如くなりて遊び興じ給ひしなど、今に忘れぬおもひでなり。其後先生脚氣病にかゝりて學校にも來られざりしかば、又八人程にて何か見舞の印にと聊かづゝ出し合はし菓子一折もどめて見舞ひけるに、殊の外欣び給ひしが、病ひ怠らぬに養生の爲め歸郷せられたるまゝにて其後いかゞなられしやを知らず、其先生は河部様と呼び柔和なる心の感化は今猶ほ妾にいらゝるき心地すなり。其後また信者の方々代りて教へ給ふうちに、矢野様古久保様などもあり幸にも續いて教へを受くる折を得たり。慈愛の心深き矢野氏は今孤兒院の理事として働き給ふ、其年のクリスマス祝會に多聞教會の演壇に立ち、妾共の組は讚美歌を歌ひたるなども亦限なき樂しきおもひでなり。大方暗黒なるわが前半の經歷のうち僅かに樂しかりつる夜學會の

こともまづこれにて筆を擱かん。

第四章 逆捲く浪

祖母の死 | 實母の死 | 弟の死 | 家の明渡 |

さて其翌くる年、妾が十二歳となりし四月のはじめつ方、老病なりし祖母は七十四才をもて眠るが如く逝き給へり。祖母は曩に母の姉方に居ましたりしも、其頃は我家に歸り給ひしなり。母は事の由を兵庫教會に報せたるに、當時の牧師村上俊吉氏を初め、丸井住納、梅本諸姉、其他兄弟がた集ひ來り給ひて葬りの式を營み下されしも、其入用は悉く教會より出して一錢の金さへとり給はざりき。祖母世にありし頃常に妾に申されたるは、われは目しひて不自由なれど、お前と共に病みたる時若しお前が盲目になりしことならば、いかに悲しき事なりつらん。幸我は生ひ先き短くもの、役に立たざれば、少しも厭ふところに非ずとひ

たすら妾を愛して昔話など聞かせ給ひ、夜も共に寝ね、祖母の給仕は妾が受持ちて爲し居りしこと故歿かりし後の淋しさ悲しさいかばかりなりけん。そのころ風の便りに聞けば妾の實の父なるものも亡き人となり。後添の妻に多くの小供ありたるも父の死後に養子に遣り又寺の小僧となりたりなど聞きしも少しも悲しき事にも思はざりしが、先に襲ねたる藤衣の袖の涙乾きはてぬ間に、いかでか知らん更に悲しきうき雲の既に我家の上を掩ひ居るべしとは、其年の于蘭盆の十四日と云ふに我家に飼ひたる鶯に病つきて朝より斃れ死ぬもの限りを知らず、母はいたく心を痛め安く賣り拂はんと思へど生憎其日は佛の歸る日とかにて生物禁断なれば取引する事も叶はず、むざむざ海に流す事となりぬ。禍ひの先驅は斯くの如くにして來りしか當時妊娠の母はその夕産氣つきて男子を擧げたり、さりながら其れより日立悪しく衰弱此

上もなかりしが、七日目の朝父は母をつくつく眺めて到底其再び起ち難きを見涙をのみて云ふ様、今日は一しは顔の色悪しき様なり、何にても欲しきものあらば云ふべしとあれば母は衰へたる頬に淋しく笑み「妾が死なば小供等が不憫なれば決して死には致すまじ、只喉が渴いて堪へ難く思ふ」と云ふに、産後には害あればと思ひて與へざりしも今は與ふべしとて買ひに出しが其日は例日に似ず涼しくして氷屋を見出す能はず、遂に祖母の導かれたる裏町の大澤醫師方より一斤頰ち貰ひて捧げたるに限りなく喜び兎角のうちに悉く噛み碎き了へぬ。かくて心確かに話さるれど顔はますます悪しく變りて心が、りなれ共如何にしけん正午ころより引き入れらるゝ如く眠たくなり父も妾も我にもあらず倒れふしたり。時たちてふど心付き先づ母を見ればこは如何に腫の色は既に失せ唇を堅く結び僅かに肩にてつく息のみなるに驚

きながら大聲に母様と云ひ立つるに父も驚きさめて水汲み來り
噛いしめたる口より強ひて飲ませたる甲斐もなく遂に歸らぬ旅の人
となりませしに猶ほ悲しき聲しぼりて母よと云ひて叫べと應答
もなし。かくてあるべきにもあらねば形の如く葬式も營みたれど其後
妾はなか／＼諦らめ得られず母は何處へか往きて又歸り來ます如き
心地して二三日は氣抜けしたる如くふし戸にありて泣き悲しみ居た
り。

其しばらく以前わが兄は田舎の農奉公より歸り鍛冶職の見習ひに
とて工場に通ひたりしが母の臨終にも間に會はざりき母なき後は他
に止宿して來る事も稀なりわが姉なる人は其頃明石の實家に歸り居
たりしが死去の報せにより歸り來りしも葬式すみし後又實家に復り
て再び我家には來ず今まで六人家内なりしが悲しき片身の子を残す

のみにして僅かに父と妾との生活とはなりぬあゝ夢の世とはこの
事を云ふなるべし祖母は年老ひたれば世を去るも詮なければ母は漸
く四十に届きたるのみなれば未だ老ひたりと云ふべからざるを母と
同じ年頃の人を見ればかの人には健かなるに我母は何故死に給ひしぞ
と思ひつれば身も世もあらぬ程なりまた友達の母よ母よと呼ぶ
をきこれ母様に買うて貰ひしなど聞く度に外の子の羨ましく夕
暮芒に浪寄る磯を歩みてあまりの悲しさに母よと呼ぶも答ふる人の
何あるべき昨日までは母に結ひ貰ひし髪も今はわが手に梳かねばな
らぬ事と櫛とりしまゝ亂れし髪にうつぶして忍び音に泣けば更らに
辛苦の數限りを嘗めて一つも安心の折なかりし悲しき上を思ひ浮べ
ていよ／＼胸張り裂くる心地する也かく何につけ母のこと思ひ起さ
ぬよすがならぬは無けれ共又た幼な子の世話もありて晝は妾が懐き

て乳貫ひに往き夜はミルクを飲まさねばならず夜も碌々に眠ること
 叶はず、幼な子の泣く一聲にも刎ね起きては乳を暖め襦袢を替へな
 し父が商に出給へる留主には子を背にして焚焚の世話や襦袢の洗濯
 に忙しければ今は夜學にも行く能はぬ程なりしが其後漸く里子を預
 る人ありたるまゝ、幼な子を託したれば其れより後は又夜學にも赴き
 たれど其年の秋十月幼児は母の愛に惹れてや歿かりたればこの一年
 の中に三つの柩を出したるにておのづから諸般の入用も多く禍の上
 塗りをなしたり。

さる程に十一月とされる頃、小供手にては縫物洗濯其他萬事不自由
 なれば人の勸むるまゝに父は後妻を迎へる事となりぬ、其母は尤も妾
 を愛しみ三味線舞などの稽古をさせ身の廻りも綺麗に飾り下さる故
 小供心に嬉しく思ひたりしが、口上手にして俗に言ふ手どり物なれば

人との交際に長じ數多の人々の我家に来るあれば酒宴を開き妾に三
 味線を弾かせ己は唄をうたひ陽氣なること青樓のそれにも似たりか
 らる程に其年も暮れて妾十三となりし四月その家を開けることとな
 りたり、そは昨年より引續きての不幸は遂に此最後の日に迫り一先づ
 小家に移りて雑用のかゝらぬ様力めねばならぬこととなり父の姉な
 るもどに同居するにより家財を賣拂ひ母に其半を與へて離別する次
 第となりぬ、母は出るをいなまると共父は強めていとまを與へたり、此
 母は元來よからぬさがにて常々人に語りて妾のこの家に來りしは夫
 に望みありてに非ず、又財産ありと云ふにもあらず、たゞ此子に望みを
 かけ居るをもて今の中に舞三味線を仕込むなりなど云ひ居りしとか
 や其後曾て入獄したる様の噂を聞き知りて父は厭ふ事甚しく遂に離
 縁するに至りたる也。

さて移れる宅の伯母は寡婦暮しにて正直一徹の人なれど何分昔し
 氣質にて妾の夜學會に赴くを好もしからず思ばされけん女の子は假
 名文字の讀み書きにて十分なり深き學問は入らぬものぞ殊に女子と
 して夜道するはよからぬことなりと申さるゝはもとより妾が身の爲
 めを思ひてなるも妾に於ては詢に辛く無理に毎夜通ひたれどいつも
 行くときは何とかいさかはねばならぬ事の悲しく遂には我を折りて
 通學をやめたれどさりどて進むで斷りもせで其儘に打過ぎたりしが、
 其夏先生尋ね來まして何故來らずなりしやと問ひ給ふに有りし由を
 答ふれば先生もそは無理ならぬ事なれど其の中を無理しても來られ
 よ必らず益あるべしと心こめたる言を殘して歸られたれど遂に再び
 赴くを得ざりしが今にして思へばかの時強るても通ひしならば文字
 書くわざも進み六つかしき書も讀み得べきにと返らぬ愚痴をもこぼ

せ共是非もなき次第なりける。されどこは伯母様をゆめうらむには非
 ず只此身の忍耐足らざりしを悔ゆるのみ。

第五章 流れ藻

工場通ひ―初奉公―大阪にての蹉
 跌―姫路にての失敗―岡山に於け
 る災禍

隙ゆく駒の足はやみ妾十四の齡も暮方どぞなりにける。父は餘りに
 勞働の激しくてにや疝氣と云ふ病にて商にも行くこと叶はざるに只
 妾が手仕事して暮すのみなれば何の助にもならず賣り残りの小道具
 を賣り又は高利の金子を借りなせして毎日の糊口を辛うじて續けた
 れ共この寒き冬空なるに父は垢付きたる單衣の儘にて綿入などは思
 ひも寄らぬ程の事なれば病と云へど醫師に診て貰ふにもあらずある
 は按摩に揉ませあるは灸點を据ゑるなどするのみなれば容易に全癒

の見込なく長引きながらも漸く其うち聊かづ、回復せるにまづ胸撫
でおろしたるなり。

降て其翌年の夏妾は初めて茶培じと云ふ仕事に行きしがこは曩に
我が母と姉どが父の病中通ひたるところにて、夜の明けぬうちより起
き行きて日の暮仕事を了り歸途に着く習ひなれど、神戸の東の果てな
れば兵庫まで歸ればいつも灯ともせる頃なり、其仕事と云へばよそな
がらも見そなはせし方は知り給ふふしもあるべきが、厚き壁は四圍を
立てこみ、鉄窓を洩るゝ空氣は汚れ、火力焰々としてこの世ながらの地
獄の釜にひざるゝ如き心地なれば歸りとなればよろめきて出づるな
り、但賃錢は十一錢なれど菓子などの代に引かるれば實際持ち歸るは
十錢程にて其頃の賃銀としてはまづ良き方なり、妾は此世に於ける金
まうけと云ふことのかくも苦しきものなるかを思へば五厘の金もあ

だには使へぬと小供心にも深くさとりたり。

さる程に其年の冬となりて父は神戸生田のほとりに鶯鷄 七面鳥
鶯鳥鶴鹿等飼へるところに傭はれゆく事となり妾も共に入り込み妾
は其家の下女代りに働さぬ。今までに覺むなき初奉公にて殊に寒き頃
なれば手はひゝ割れ冷き流元に水仕する時などは手もちぎるゝ思ひ
しつゝ、雇はれの身となれば猶ほ他にも兎角つらき事ありて諺にさく
「他人の飯には骨がある」とはよくも云ひけりと勞働の苦しさと共に奉
公の辛らさをしみゝと味ひぬ。其内主家の隣の漬物屋より妾を暫時
貸し呉れど、話ありて其處に赴きしが朝夕の店の繁昌實に夥しきも
のにて此忙しき時には二歳ばかりの女の子を背負ひて出ゆくなり朝
まださ東の空の白む白まぬ其處ゝはや戸を叩きて買ひに来るもの
あり、こは例の茶倉稼ぎの人々にて睡き眼を幾度こすりて起き出でけ

んある朝くらき頃例の如く叩き起すものあるに出で見れば小供が五厘出して醬油を求むるなり、いかに貧しき其家の有様ぞと同情の心堪へ難きに主人には濟まねど其容器に一ばい與ふべしと思ひしもこれも小さく限りある瓶なれば是非もあらざりし。

かゝるうち父は又疝癪と云ふ病になり急にさしこむことなごあるに遂に其家も暇をとり前の宅へ歸る事となりぬ、いかに人世のよき事のつゝかざるやつく、思へば愛憎もつくるなりけり。妾十六歳となりける年「しこみ」と稱へ年は永ければ藝妓にゆく口あればとて勸むる人あり、女は氏無くして玉の輿といふこともあれば藝妓になれば又立身のよすがともなるべけれど斯く裏家の隅に燻り居ては出精の機も無なからんと父も其氣になり神戸なる元町の邊に然るべき口を見出したれど五年との事に餘り長ければとて約調はざりき、其後大阪松島

の東京樓と云ふに藝妓入用との事にてさる女の人に連れ行かれたり。其處は松島遊廊に於て第一を占むる由にて娼妓丈けにても五十人あまりもありとかや。

まづ着きて目に入るは其構造のひろやかにして雅びたるなり、店には生花と屏風あるのみにて奥まりたる廣間に招き客にはまづ寫眞を示すならひなりとか、其娼妓の風もさまゞにて、繪に見る如き太夫の風に飾り居るもあり、侍女の如きもあり、あるは洋装して椅子に凭れるなど風は異れ共其綺らびやかなるは目もさむるばかりにうかれ男の迷ひ入るもうべしこそと思ひたれ、其他藝妓舞妓傭ひ人合せば百人以上にもならん、されば設備も太らかに浴場の如きも二つに別れてさながら町の湯屋にも異らぬめり。

さて妾は身なりを調へ主人の前に出でぬ、通稱手見せとて三味線を

弾きて見するなり。主人の云ふ様、藝妓に成て欲しければ、此頃諸方より
 來りて見らるゝ如く既に十四五人もあれば、娼妓に成り呉れずや、尤も
 年齢不足なれば、満十六までは舞妓の風にて、松島踊りの地方を習はせ
 置き、齡みちなば娼妓とすべしとの事なり。妾は素より娼妓など、に身を
 賣らんとは露程も思ひ居らざれば、連れの女と主人とが再三いろく
 に勸むれ共、父も必らず嫌はるゝ事なるべく、又わが心にそまねば飽く
 まで斥けんと心を定めて、如何にお勸め下さる共厭で御座りますと云
 ひ切りたるに、さらば致し方なしと連れ來し女の人は、我はこれより河
 内に用事あれば一人にて歸られよとのことなり。妾は懷中たゞ二錢あ
 るのみなれば、瀛車にも早船にも乗る事ならねど、神戸までの道のりは
 十里どきけば歩めぬこともあるまじと、思案決して歩みはじめたり。道
 に神戸まで「サ、ラ」の商品を持參してゆくと云ふ若者と道連れになり、

同行して送り申すべしと親切めかせど、何か底氣味悪ければ、少しも心
 許さず、食事をとて行厨を分ち呉れしをも、辞み合乗の車をやどひ來て
 共に乗れど、勸むるをも斥け、其日は焼餅一つをか、の二錢のうちより求
 めて正午を凌ぎ、猶ほ其中より橋錢など拂ひ、兎角のうち脱ける様にし
 て、辛うじて一人となり、夜の八時頃宅にかへりしに、父も伯母も留主な
 りしが、ひとり食事をはり湯にも入りて、前後も知らず翌朝まで寐ね
 たり、あくる日目さめて事の由を話せば、父も尤もと云ひ、十里の道をよ
 くも歩みて歸りたるよと、呆れ給へり。

大阪より歸り來りて後、父の心易き人にして、其頃島上町にかしわ屋
 を營めるが、妾を手傳に寄こし、呉れずやどの事にて、仲居代りとして赴
 きたり。かく奉公の身なれ共、忘れ難きは、亡き母の事にて、二ヶ月に三度
 ばかりも墓參を爲し、花を立て水を替えなすするを、こよなき樂みとし、

さながら母に會ふ心地したりしが、又つくゞと苦勞のみにて一日一時の樂しき思ひもさせ申さざりしこと、かれやこれや悲しき數々をおもひ出づるなりけり。母の生れ給ひし家は兵庫眞光寺の角にて其家の裏に柳の大木あるは母の姉なる人の長女の初節句につきさしたるがかく大きくなりたるなりとの話しを母より聞きたれば、今は知らぬ人の入り居るなれども、それとなく見にゆく事もしばゝなり、今も猶ほあるべし。

其うち父は再び後妻をむかへ給へり、其母にも二人の子あり十一になる女の子は他に奉公を爲し、七歳の男の子は連れ來られたり。父は男の兒を失ひて久しければこよなく愛しむに來し初めには病身なりし子も追々元氣になりたり。かくて妾がかの島上町にある其年も十二月末つ方になれる頃、同じ家なる朋輩にて「こと」と呼ぶ二十一二の女あり

けるが、此家は業ひまにして所得少く、主人は口八釜ましきのみにていつまであるも見込無ければ二人共に此家を抜け出で姫路あたりへ赴き忙しき料理屋に奉公し、着物もこしらへ金も貯へ二三年経ちて立派にして歸りては如何どの事に妾もたゞ若き心の乗り氣になり深き考もなくしてさらば其心算をせんと三味線と單衣物を其女に渡し、それにて路用の金を調へ手荷物提げて日暮頃別々に抜け出で柳原ステーションより瀛車に乗り其夜は明石なる連の女の家に一泊、翌日大久保まで瀛車に乗り其れより西に向ひて歩み出せり。何の目的もなき旅なるをさのみ心配もせず四方八方のこと話しながら清水と呼ぶところへ來しとき妾はハガキを求め父の許へ二三年経てば歸り候ゆる御心配なき様にと書きおくりたり。

其うち三時も過ぎけん冬なれば夕景色野山に迫るに今宵はいづれ

に泊るべきやなと互ひに云ひかはして稍々心細き折柄一人の角力取
 あとより來りて我行く先なと問ふ、我等は事の由を話したるに力士は
 我に隨き來られよ宜き様に世話すべしとの事につき行けば新在家村
 と云ふに入りたり、力士はとある家に入り妾等二人は表に立ち居たり
 しが暫らくして此方へ入れよとの事なり、其家のあるとは放れ駒清
 吉とて角力の頭取なとずするものにやあらん、年の頃五十餘の人なり、又
 十九か二十と見ゆる娘ありて萬事親切にもてなすも嬉れし、主人は我
 等の神戸を離れて下の方へ行くなとは此上もなき不了見なり、此霜枯
 の時節に大阪邊ならばいざ知らず姫路なとはとても神戸の料理屋に
 比ぶべきにあらす、さりながら一旦の御決心なれば兎も角口は探して
 進すべしとの事に、妾等は只宜ろしくとのみ頼みたり、其夜は田舎の人
 々の珍らしがりて集ひ來るあり、いつかは酒宴のさわぎとなり、三味線

とり來りて我に弾けよと云ふに妾も面白きふし弾きやればかの角力
 取りも踊り興がりしがやがて宴はて、其人は西谷村の角力の親方の
 宅に妾等をみちびき其家の内儀に妾等の事を托したるに其處にても
 親切に扱はれたれば心を安んじて一泊し翌朝禮をのべて立たんとす
 れば先づ緩くり逗留せよ魚も買ひ置きありなと、まことに親切に云
 ふを強めて辭し再び頭取の宅に赴き魚の橋と云ふ處の尾上の松と呼
 べるに手紙を貰ひまた西へ、と歩み漸く尋ねあて、中に入り手紙
 を出して頼みたるに其處も人多くて置き難しとて更らに姫路の紺屋
 町の宿屋うし尾春松と云ふへ手紙をつけ貰ひ且つあると「其家の老
 婆は至つて剛愎なる性故氣をつけられよ」の注意を受け重き足を阿
 彌陀驛まで曳き其處より氣車に乗りて姫路に着きさて尋ね當て、先
 の如く頼めば主人は領づき如何にも承知せりと云ふにまづやれ嬉し

やと胸撫でおろせり、あくる日一つ口ありたれどそはや、齡更けたる
 もの一人どの事にて妾の方は猶ほ三里程先なる正條と云ふところに
 三味弾く人欲しければ其方へ行かれよとの事なれどつくつと思ふに
 旅の空の心細くたゞ一のたよりの連れに別れ、妾一人三里も隔たりた
 るところにゆくを悲しめば、連れも亦同じ家ならではと云ふに只當惑
 の眉をひそむる折柄下より妾を呼ぶに下りゆけば老婆と話し居るは
 丹禪を着たる女郎屋の主人とも見ゆる風體の男なり、老婆は妾に向ひ
 この人の宅に藝妓が入用なれば行かれずやとの事に妾は心に驚き、魚
 橋にて剛愆と云ひしは此處なるべしと腹立てど、只さりげなく考へ置
 くべしとて二階にかへり此由連れに語りむざざどかの老婆の餌食
 となるは餘りに残念なり此上の憂目を見んよりは一刻も速く此宿を
 出でたければ、緩々他の口を探さんには宿るべき金も無し、瀛車に乗

らば直にも歸り得べき道なれどそれとても先立つは金なり、西に向き
 ても知るべなく東の方を見ればたゞ戀しうて翅なき身の嘆かるゝな
 り、かくて其日も夕方ゆふかたに迫れどよき智恵も出ず詮方なさに二人して歎
 き悲しむさまを一人の客人の怪しみ見て、何をさばかり泣くぞと問は
 るゝまゝに詳しく實を話せば其人も氣の毒なる面持して我も兵庫に
 て湊町の藥屋なるが明日は歸るなりと聞き、妾等は羨ましさをなつかし
 さにこみあげ前後も知らず、妾らも歸りたれど脱れ難き此場合なれ
 ば何卒み情のもとに連れ歸り給はずやと聲合せて切ちに乞ふ、其人考
 へて我が御自等おんみらを連れ行かば此家の老婆が定めし我を恨む事ならん
 いかにと傍への人に問ひなぞしてたゆたひしが妾等がひたすら頼む
 に其人も思案決し、さらば明日我が御身等の勘定を支拂ひ置き我まづ
 停車場ステーションに至り居るべければ御身等は後より來らるべしと翌日かの客

は其如く爲したれば妾等は後れて何氣なき様に宿を出で、停車場に到れば果して待ち呉れ居たり、其内瀛車も着きたれば匆々乗り込みて安堵の胸を撫でぬ。瀛車すゝみ行く程も二三年後着飾りて歸らん望みは一朝に消え金を費ひ苦しみに會ひかゝる不面目なる様にて歸るとは世の事は頼まれぬものぞかし、連の女も明石にも歸られず又神戸に赴きて口探すべしとなり、妾等は其藥屋なる客に厚く禮をのべて家にかへれば父は且つ驚き且つ喜び、いかに案じ居たるぞ何は兎もあれよくこそ歸りつれと喜ばれ我が一伍一什をきゝ其藥屋の費用も厭はず助けかへり給ひしに禮に行かでは濟まずと常に言ひ居れどさて空手に赴くこともならず其儘になり居るは今に妾の誤りなり。其後また他の料亭に赴き働くらちに其年も暮れぬ。

明くれば妾十七才となりぬ、春四月の頃また胃病に罹りて宅に歸り

しが大熱發して食事さへなす能はず、ひたすら養生する程に二十日餘り立ちて全快せしかばこたびは再び島上町の料亭に復る様になりたり。其のうち備前の岡山に藝妓の口あればとて勸むる人あり、されど妾は大阪行にて先づ懲り昨年姫路にて苦しみたれば最早何處にも行かじと決心したれど、再三勸むるにさらば父君は何と申されしやと尋ぬるに、父君は御身の心任せにどの事なりとときゝ、妾思ふ様母存命の節いつも〱妾に云ひ聞されたる、汝は外に子よりも一層父に御恩あれば孝行せねばならぬ、生みの親より育ての親と云ふ事もあるにまして祖母も兄も汝も世話せられたるなれば三人ぶりの孝行せよとの教は此處なり、藝妓になれば或るは立身のよすがともなり父を樂にさせ申すべき道もあるべく、又萬事が萬事まで調はざる事もあるまじと決心しこたびは家の主人にも機嫌よく暇乞をすれば主人も父の爲めと

の心に愛で、直ちに許し呉れたり。用意も調へ、今一人新川の女郎屋の娘にて、妾より一つ下なると共に紹介人に連れられて、汽車に乗りぬ。明石、大久保と昨年過ぎたる山河の景色を見るにつけ、數々、困苦にも會ひたれど、又情ある人に助けられたるより見れば、世は鬼のみにあらずるめれど、此度は願はくば都合よく成就する様に、窓より走る稲田、松林を眺め、折々、少なき社の見ゆるあれば、心中に何神様かは知らねど、我を守りこのたびは好都合に行く様に、念じつゝ、行く程に午後より空かき曇りて、今にも雨りそめん景色なり、紹介人云ふ様、岡山までの切符は買ひたれど、兎角する程に大雨となるべし、一つ手前の驛より下りて泊らんとて、其夜は西大寺に落付きぬ。紹介人翌日又云ふ様、此處によりき口ある由なれば、岡山まで行かずして止まられよとて、或る家へ妾を連れ行きたり、三日ばかりは入こみとて、其宅に止めさせ、と試めし

見る事となり、今一人のは外に連れ行かれ、妾のみ止まりぬ。紹介人は、年季の相談をして、四年と極め、又金額も定め、たれど、鑑札の下渡を願ふ爲め、一度は歸りて籍をも送らねばならずとて、紹介人は五圓を妾の名前にて、主人より借り出し、持ち去るに、妾も委細父へ認めて、托したり、それより日々大鼓の稽古をし、又姉藝妓に三味を温習へ、貰ひなぞす、家内のものは、新子さんに名をとて、(新子とは新たに、かゝへし故なり)笑子とすべしかなど、詮議の末、我家の福となり、貰はねばならぬ故、福八と名づけんと、それにて極め、更に此地にては上方の言葉を好む故、此處の訛りにならぬ様氣を付けよとの事なり、げに一度、び松島の電燈、眩ゆき、東京樓の百人あましも抱への人は、ありながら、少しも目立たぬ程の廣やかなる様を見し、我には此處の狭く、四人ばかりの妓のみの見すばらしきさまを都鄙との相違よりも、猶ほ甚しきものに思ひぬ、此處にて上方の新

子と云へば大切がらるゝなれど聞くところによればこの邊の慣習として二枚鑑札とやらの藝妓とも娼妓ともなるものと云ふに、只藝妓のみと思ひし妾の驚き一方ならず、娼妓をする程ならば松島よりは歸らざるなり、ざるを斯るいふせき片田舎に四年も苦まねばならぬとすれば到底堪ふるところにあらず、鑑札の下らぬうちに早く分別せねばならずと思へるうちにも姉藝妓達うち寄りては一日も速くこの泥水中を出で、素人になり堅氣に暮したしと指折りて其日を待てとまだ遠くして悲しなと、眞身に語らへるをよそに聞きては一刻も堪へ難き思ひするに加へて紹介人に托したる書面も果して父が見たりしや否やそれも懸念のうち、其後前の主人に端書を出したるに却て父より返事ありて紹介人は未だ歸らず便りもなき故如何と案じ居たるに主人方への端書に依りて初めて西大寺にありと云ふを知りたりと

の事に愈々怪しく思ひ、さらばかの金を持ちていづくへか逃げしにはあらずやかの借金だに無くば今破約する事も容易なれど妾が先に押印して借りたるなれば其償ひは爲ねばならず、此上居るも如何なる災禍の來らんも斗り難しと思ひ、妾は父より一圓貰ひたりし残りあるをたよりに脱け出で、船にて歸らんと決心したり。

此家は奇妙なる構造にて表は二階の如く地面高く裏程低うなり、裏口の戸は錠を鎖し外には小川ありて板橋を架せるなり、逃ぐるならば是非この裏門の鍵を手に入れ置かねばならぬわけなれば只管隙を覗ふ内、妾にさる企てありとは知らねば今日も皆々午睡の夢に入りぬ、妾も假に眞似はしつれど眠る心にもならぬば人々の睡に落ちしを見斗らひそと起ちあがり、ひそやかにおのが着替を仕舞ひある箆笥よりかねて用意の包みを取り出し箆笥の上にある鍵を帯の間に狭み下へ下

り行き古行李の空きし中に包みを仕舞ひ何氣なき様に又かへりて睡れる真似をしたり、やがて夕方にもなれば皆々連れ立ちて湯屋に赴きしが其間も妾は鍵に心しつゝ、かへりて身ごしらへもすましたり。夕闇は知らぬ野山にせまりて蚊遣の煙立ちこむる頃となれば時こそと手拭さげたるまゝ、庭の井戸の方へ行かんとするを主人は見付けて福八さん何處へと問ふ、妾は胸に釘うたるゝ思ひしたりしが、はい手拭を清ぎにと早速軽く答へたるに主人はもとより疑ひの心もなし、やれ嬉れしやと急ぎ錠を開け置き、また他の廊下よりもどの箆笥の上に錠を置きつゝ、みを小脇に抱へ恐るゝ戸を開き、跣足になりて音せぬ様板橋を渡り漸く野の徑に出でたり。日はとつぷりと暮れはてたるに野道を分け行くのみなれば心細く誰れか物問はん人もやと見やる向ふに一人の男のゆくを聲かくれ共、薄暮野の道を女風情のたゞ一人歩め

るなれば何どか思ひけん一寸見かへりたるのみに返事もせで急ぎ行くに、妾も急ぎ追付かんとすればかの人も亦走り出すを漸く追ひすがり船場までの道のりを問へば、猶ほ訝し氣に妾を見て一里十丁と云ふ重ねて近くに俤はなきやと問へばこの先の菓子賣る家にある事の禮を述べて漸く尋ねあて俤に乗りて船場まで着き待合にある間も小蔭にひそみ居しが漸く通ひ船より船に乗り移れば胸の動悸は先づ収まりたれど西大寺のことは夜もすがら案じ煩らはれ、今頃は妾の姿の見えざるに驚き箆笥の中のわが衣類、裏口の錠など見たるべし、されど主人へは判人は五圓を持ち去りしまゝにて未だ兵庫にかへり居らず、人より聞けば岡山にありとの事なれば一度會ひてはやく方を付くる爲め参りて歸るべければ御心配なき様しかと、と書き置きたれば定めし岡山へ追手を走らせしなるべし、我拙なき計なれど圖に中り危

うき中を脱れし嬉れしさよと思ひつゝ、夜明頃播磨灘も過ぎて朝六時神戸に着きまだ眠り居れる宅の戸を叩きて入りたるに家内の者の驚き一方ならず、妾は事の由語りたるに父もよく歸りたりと喜ばれぬ。西大寺よりは其後何の事もなかりき。

妾三度かゝるうき目にあひ又もとの主人方を尋ねたれど引越し居りたれば其冬より須磨は一の谷のほとりなる松の家と云ふに入り込みたり其處はもと夏向きを旨とせるところなれば冬は閑なる方なれど翌くる年の正月などは相當に忙しく、妾を主人に借りに来る故町藝妓の如く傭はれ幾分収入も良ければ折ふしは父のもとへも送金する事を得たるなり、されど其處も暫らくにして此度は兵庫樋の上なる鶏肉屋に傭はれしが、須磨よりも猶ほ都合よく毎月の収入より父へも仕送りおのが身の入用も辨じて餘りあれば此處にて二三年も経て

ば兎に角樂になるべし、今年の盆の休みにはよき衣裳をこしらへて大阪へ遊びにも行かんなど、果敢なきことを樂しみつゝ、不治の病の手の妾を捕ふべく近付けるをさへ知らぬぞ淺ましき。

實の母死にしより吾兄は別れしまゝ、程過ぎて大阪に行きたりと聞くのみにて一度の音信も無かりしが、妾が此度の家に赴きて間も無き頃七の宮の祭典にて忙しき日一人の神輿かつぎの風して二階に上り來し客の吾兄の友なるにはからず出逢ひたり、いろ／＼話しの末兄の事も聞き、妾がかの上を恨みて云へば成程尤もなり我一度手紙を出して呼寄せんとて幾日も経たぬうち前の人は兄と共に來りぬ、妾は兄の顔を見るや否や、義理ある父のもとへ一錢の貢もせざるのみか、永年一度の音信もせず、たゞうか／＼と極道を盡し居らるゝとは餘りの事ならずや、御身一度と雖母のみ墓に詣で給ひし事ありや、一體ならばわが

家にありて父を養はねばならぬに聞けばよその養子に成り給へりとの事なり、そはいかにもあれ無益に費ふ金を月々父のもとへ送り越されよと云ふうち思はず涙の流るゝに兄ももて餘まし此後は屹度父へ少々は送るべしと云ふにさらば必らず違はぬ様と念を押して其夜は連れもある事なれば機嫌よく酒汲みて兄も歸りたり。其後父のもとへ赴きし時此間兄より汝の名前にして金二圓送り越したりとの話しに先夜の事を語りて喜びしが其れも再びとは續かず音信も絶えたるなり。

第六章 烏婆玉

最後の運命―病魔襲來―西宮にての失敗―大阪に於ける流浪―一家の諍―斬髮

最後の運命は來りぬ、恐ろしき病の手は徐々として妾が身に迫り來

ぬ、其年六月初めつ方ふと身體の節々痛く立ち座りに難ければは多分使ひ痛みなと云ふものならんと思へば按摩をどらせ又は温泉に浴しなと試みたれ共其効なし、醫師に診て貰ひしにリョウマチスなりとの事にて服薬を初めしがこれも聊かの効なく今は座す事も固ければ心堪へ難く、昨年須磨にありし頃胃病の客のもとへ外氏と云ふ名醫の見舞ひ居られし事を思ひ出し、主人に暫時暇を乞ひ同地の知る邊の宅に逗留して其先生の診察を乞ひたるにこたびは利目ありて七日間に忘るゝ様になり先生も大丈夫なりとの仰せなりしが七月に至りてまた起居に惱む様になりぬ、此家の主人は至て好き人にて妾をいたはり二階へもの運ぶは他の人に任せて只客の前にて取りなし居ればよしと言ひ呉るれ共さすれば朋輩にすまざれば遂に下の立ち廻りをしたれ共病は嵩じて大熱を發し遂に其家に寐ね付くに至りぬ、あゝ妾は

遂に病みぬ、歸らんか健やかにありてさへ義理ある母の世話になる事の心苦しきに況して寐床に臥しては寸時も堪へ難からんと思へば此宅に留めて何にてもあれ相當の用をつとめさせ貰ひたしどの意に主人も事情を知られば親切にいたはり下されたれど何分慕る病を如何共し難く心ならずも我家に歸りたる後は瞠とばかり病みふして醫師のもとへ通ふ事も叶はず、又須磨なる外先生も年頃肺病なりしが遂に歿り給ひしとき、望みの綱も絶えはてたるなり。

かくて妾は賣薬にて下しをかけ又灸を据ゑ、聞く程の事は皆洩らさず試みれば効果は見えず。或時伯母様來たまひよき薬を得たりとて妾には見せず、只大海に棲める魚にして容易に得がたきものなりとの事に妾はこれ必常厭らしきものなるべしと思ひ、伯母君の知らぬまにそと見れば果して薄黒き蛇の于したるものを二つに裂きたるにて

頭なとも其儘付き居るさまに思はず身を慄はし、いかに効目ある薬なればとて斯るものゝいかで喉越すべしやと思へど、伯母はそれとも知らず調へ來り我が目前にて飲むべしとの事に其ま心も無ならず口のはとりまで持ち行きては躊躇ふを速く〜と急がるゝに辛き涙と共に一息にのみたり、かゝること三日ばかりつらき目をしたる甲斐も無く徒らに日を過すうち其年の十月末の方前の主人來りて西宮に大神宮を祭りて呪術するものあり何の病にも利目あれと殊にリヨウマチスに良どかや、手紙も添ふべく費用も出すべければ行かぬかどの事に嬉しく思ひて早速其處に赴き逗留したりける、其人は五十に近く烏帽子狩衣着て拂ひ給へ清め給へと呪術を爲し痛む節々に息吹きかくる如き様の事のみ三週間も續けたれど何の効果もなかりしが猶ほ希望を繋ぎて父が着替物を持ち來まし、時歸り度くは無き哉と尋ね給

ひしも猶ほ止まる由答へたるに、或る夜女房の大阪に行きたりし留守に職柄にも似ず年齢にも恥ぢず病ひある妾に不義を云ひかけ迫り来るを辛うじて道理のもとに刎ねつけたるが妾の信もこゝに絶えて翌日早速大阪なる兄の許へ金を持って至急來られたき旨云ひやりしに、兄は其夜よりかけて五里の道を歩み來れりとして夜明けて間もなく戸を叩いて訪ひ金壹圓五拾錢を與へたまひしは實の兄なればこそと胸に手を合せ拜まゝはしく思ふばかりなり、かくて支拂をして主人に一先づ立歸る旨を云ひて失望落膽の身をまた自宅にかへし猶ほ募る病の床にうち臥しぬ。

其年も追々押し詰る程に妊娠中の母は廿日に産の紐を解き安らに女の子を擧げぬ、かゝる取込みの中にも妾何一つの助けをも爲し能はねば傭人などしたるが兎角のうちには妾は十九歳の春を病床に迎へた

り。其頃奉公に行き居りし母の連れ子の娘も歸り男の兒は學校に通へるに今また一人殖えたる事とて父の手一つにて此大勢家内を養ふ困難たどへ難く、殊に病の妾に金の入ること尠からざれば妾が丹精して作らへたる着類は更なり、小道具又は頭の飾りものなを悉く賣り盡したれど寒さに入りてより痛みいよゝゝ激しく節々腫れ上り日は日ねもす夜は夜もすがら眠れるまもうつゝに痛しゝと叫びて傍の人の目を覺す程なり家の生計困難なるにつけ妾の事にて家内にいさかひ絶えず、これを病の床にてたゞ聞き居る心は口にも筆にも盡せぬばかりなり病は愈々募る家はますます貧しくなる、家内はいさかひ絶えず。これを病の床に聞いて何をしも爲し能はざる妾の身は何と云ふ因果のものなるぞ、此間に妾が脱るべき道は恵み深き父には濟まねど唯死あ

べく、いさかひも自から止むべし、母には薬と偽はり毒薬を求め来て貰ひそを仰ぎて死なんか、跡にて義理ある中なれば意外の累を及ぼさんも煩はし。寧ろ裏の井戸に身を投げんかど夜もすがら一念茲に臻れば眠れもせず、四邊を見れば人も寝静まれるに危うき足を踏みしめ壁を便りに漸く裏口まで出で井戸のあたりを眺むれば天地寂として眠れる如く静かなるにこれ幸と思へども最早や取りすがるべき壁も無ければ歩みを移す事能はず當惑の眼をはるか彼方に移せば高取山の松の間より幽かに見ゆる社の燈火に心も消ゆるばかり淋しき思ひしつゝ、又力なく後戻りをして臥戸に入りたる事もありき。

其後妾は兩足に瘡癩を起す癖つきて度々起り鍼をして貰へば僅かに良けれど其れも一時の押へにて暫らくせばまた起るなり。さる程に五月雨の降りみ降らずみ我泪も乾かねば、夏も最中に至れ共濡衣干す

にはいたらず只暑さと痛みとに一層衰へ行くのみなり、其れも其筈狭き一室に大勢家内と一つ蚊帳にて暑さに蒸さるゝ如き其様を伯母様の見舞の節見兼ね給ひてや、我家も廣しと云ふにはあらねど我一人なり、又蚊帳釣る世話も無ければ我家に来るべしとの事に誰よりも先づ妾は大に喜び、父より月々伯母に一圓宛仕送り給ふ事にして赴きぬ、此處は湊川の堤の下にて、松の葉越しの風涼しく、蚊も居すまことに樂なるに、伯母様は親切にいたはり下され、行商より歸りて疲れ給へるにも係はらず、わが痛めるところを撫でさすり、また薬を煎じたりなごの骨折り一方ならねど、伯母様は少しも恩に着せず真心より盡し給ふに、行商の留守に晝は妾一人なれば淋しさに日あしの傾くを待つならひとなりぬ。或る日伯母様は須磨より商ひの歸るさ駒ヶ林より道連れとなりたりとて天理教の導師と云ふ人を伴ひかへりたまひぬ、其人我病を

癒しやらんとて天理教教祖なる老婆の徳をたへ懺悔して信じなば
 病氣全快すべしと説き携へ來れる靴の中より小さき金米糖三粒づゝ
 包めるものを取り出し、これは「カンロウライ」とて此世の始め天より降り
 て人々を養ひしものにとへたるなり、一日三度に上られよと出し、座
 したる儘手先を動かし踊る如き様を爲し「悪シキヲ拂ウテ助ケ給へ天
 理ヲノミコト」など歌ひつゝ、其後毎日來りては斯の如きことしたりし
 が何の効果もあらばこそ、今は一足すら歩む能はずなりたり、さもあら
 ばあれ病の苦は猶ほ忍ぶべきも、此伯母の許にありて幾らか安き思ひ
 をしたること、亦暫しにして伯母の生計も不如意となり一旦家を疊
 みて他の座敷住居し給ふに止むなく妾は又もどの自宅にかへりて氣
 兼氣苦勞に晝夜涙を友として送るうちに其年も暮れて妾は二十歳の
 春を迎へぬ新玉の年の初めとは云へど妾身は相も變らぬ病の床にあ

るのみなり。

先之父は大阪のわが兄のもどへ度々手紙を出して助力を求めらる
 れ共何の答も無きに餘りの事と親ら出掛ては却りて空しき費を生ず
 るのみなれば、慈悲深き父も心に据へかねて折々不足をのたまふを聞
 くわが身の辛さたとへ難し。さる程に幾度か嚴しき相談を重ねるうち
 兄よりは人を以て金と云ひては別に仕送る事叶はねば妹を引取りて
 世話すべしとて妾を迎へに來りしに、心進まねども止むなく迎ひの人
 に背負はれて行くに其頃妾は腰に床摺れと云ふもの出で小皿程に爛
 れ居るに瀛車に俥にゆらるゝ度の痛さ只忍び音に泣くばかりなり。驢
 て兄の宅に着きたれど其處も兄の妻子のみならず、妻の母もあり妾を
 加へて六人となるに兄一人の手に働く中を浪費することなれば、十五
 日三十日の勘定にも金を持ちかへる事なく生計の困難云ふべき様も

無し。其家の老婆は妾に向ひて兄に意見し呉れよと求めらるゝに、稀に居たまふを覗ひはかりて「小供もあり老人もあり又妾が厄介になり居る今日なれば何卒費ふ金を家に入れて給へ、只さへ氣兼ねなるに御身の身持悪しければ御老母や姉君に對する妾のつらさは一しほなるを思ひやりて何卒固氣になりませ」と諫め參らすれば、兄はたゞ「左様のことをくよ〜」思ふが故に猶ほ悪しくなるなり、何も思はず氣永く養生せよ、一體我は汝が立身せば世話にならんと思ひ居たるに、逆様になりたり」など笑ひて取り合ひ給はぬに妾は呆れてかへす言葉も無き様なるに老婆は又老いの癖とて摯拗こく繰りかへし、夜しばし痛みを忘れて睡れる妾を起して「あの極道は今宵もまた歸り來らず、歸りなば早速厳しく諫め呉れよ」とせがまるゝに諫むれ共其甲斐はなし、殆んど板挟みの様なる目に逢へるわけなり。其後妾は水に中毒したるにや腹痛を

催ふし又下痢したりなどする爲愈々衰へ初むるを此家の老婆は父の許へ幾度か端書を發したりと見えて父は來りぬ。妾は兄の身持悪しく、生活困難なるより先きの事をも話し、何卒この板挟みの苦を遁れしめ給はれと乞ひまつり、明春にでもならばと云はるゝを強めて願ふに父も餘義なく承知して一ヶ月一圓五十錢宛送らしむべしと老母と約し、兄は不在なりしが又會ふ日のありや無しやと思へば流石に名殘惜しまるれど其儘父の脊に負はれ夜氣車にて兵庫へ歸りぬ。

思ひやれば師走の二十五日、巷吹く夜風に手足も凍る頃、彼方へ行ば此方へ突き廻され、此處にありてもつらく、彼處へ行かんも誰れ一人欣び迎へ呉るゝにもあらぬ薄命の子を、髪髻き老いの背負ひて息きりつゝ行くあるを、失望に馴れ困苦に倦みて今は歩む力も無き足なるに、父は或を背負ひしうへに手荷物あり困難此上なきを誰れかは知らぬと

立派なる紳士の後より親切にも父の手の持物を持ちかへさせ妾に着せたる着物の落ちかゝるを着せかけなごし給ふ嬉れしさは悲しみに
 は出でざりし涙ゆくりなく此處に湧きて咽びながら禮をのべ十二時
 近くに我家の門に着き父は表より早く開けよと云ふに母は起き出で
 給ひ負はれたる妾を見て大阪に置き給ひなば宜きものを又連れて歸
 られしかと云はれし時妾は魂も消え胸も張り裂くるばかりなり其夜
 妾は碌にも寐ねざるに父と母とは夜もすがらいさかひ給ふを聞ては
 妾はひたすら罪多きをかこつの外どなき近隣の人々も初めの程は尋
 ね給ひしがかく永びきては今誰一人のおとなひもなきさへあるに
 況して長き年月を傍に苦しめるを見られては如何様に思はるゝも詮
 なきことなり上なく妾をはぐみます父と雖も生みの親にはあらぬ
 を近く來たまひしのみ母君の迷惑がり給ふも道理なれどあゝ絶ゆ

る間も無き争ひをきくつらさ又連れて歸られしかと母の言葉のかゝ
 りたる刹那あゝ妾は何故舌にても噛みて死なざりしかさは此うき目
 を見る事もあるまじきに……

歎きのうちに妾は二十一才の春を迎へぬ若しや全快の日もやと思
 ひて其儘のばしたりし髪も病の床に寐乱れて梳る甲斐もなきに何の
 用かあらんと思ひ切て五分刈りの如く挟み貫ひたり妾は今たそを
 惜む程心も若からねど四才になる妹の傍にありて眺めたりしが挟み
 了へしを見妾の頭を撫で小供ながらに泣き出せり春は去年の如く
 過ぎいまはしき夏となりしが此處にまた母の連れ來し男の兒は十二
 才となり小學校も三年まで進みたりしを不圖病に罹りさまゝ手を
 盡せども次第に悪しくなるばかりなるに診察を乞へば腦病と心臓病
 と云ふに到底回復の見込なく遂に八月五日歿かりたるに母は狂ずる

ばかりなげき悲しみ父とても七つより我子となして育てたる事なれば其力落しは只ならぬと泣くく野邊の送りもすませたり我家も彼方此方と移りしがこたびは同じく兵庫の松本通によき飼場ありどかにて其處へ赴きしは十月なりしがやがて其年も暮近くなりぬ。

第七章 救ひの舟

一點の光明 | 義人の厚恩 | 聖徒の慰藉 | 悔改

妾の身に付て父母の間の争また起り父は怒りて母を追ひかけ母は表へ逃げ出せり此時通りかゝり給ひし紳士入りて仲裁を爲し給ふに父は禮を陳べつゝ耻しながら争ひの原因を話すとて妾が方を指し「おれに臥し居る病人は私の實子にては候はねどかく難病に罹り居れば私 は不憫をかけ居るに家内は兎角を疎む故只今の如き次第にもなりしに候と云へば其紳士妾の方へ進み寄り圍ひある筈の上より覗

き給ふに妾は涙ながらに禮を述べぬ紳士は母の方に向ひ人の身は何時かゝる病に罹らぬとも斗り難ければ人にするとは思はず何卒渠をいたはり遣られよと宣ひて歸られたり。

昨夜の紳士は翌日夫人共々尋ね給ひ菓子を下され夫人はむさくるしき夜具をも厭はずわが肩口へ着せかけなと残る方なくいたはり給ふ紳士の宣ふ様病院へ入れたく思ふが如何費用は我より出して全癒する事ならば何卒して癒しやりたしとさまへ語りて歸られたり。あらゆるものに見放され世にすむ甲斐もなき妾に夢にも知らぬ人のかく親切に慰め給ふは我靈魂にとりても肉體にとりても此上もなき大恩人にて罪の死病より癒し給ふ神のみ使なりし事は後にぞ思ひ知られたるなり其紳士は我家の隣りの方に住み給ふ由にて毎度尋ね給ひしが或る夜母と妹は湯に赴ける留守に尋ね來たまひ金子の包とビス

ケットに小書き書を添へて賜ひたるを手にとり見れば上書には紅き鉛筆にて名は記さで「神の恵」とあるのみ、其時妾はこの方は必ず基督信者なるべしと思ひしかば「あなたは信者にていらせらるゝや」と問へば「さなり、キリスト教を知り居るか」との事なりさてはと思ひ「時々風琴の聞ゆるは御宅に候や、妾の祖母も信者に候ひし」と云へば「何處の教會」と尋ね給ふ「兵庫教會なり」と答へしに「文字は讀めるや」と尋ねらる夜學會にて少し學びしことなど語るうち其夜は歸られたり、あどに小書き書をとり見れば「今は救の日なり」哥後六〇二とあり。

二三日過ぎて兵庫教會より丸井住納梅本の三姉共に來られぬ、祖母の葬式の時に會葬下されし方々なれど一時見忘れしが、かなたは昔しも今も變らぬ親切にまた我世さびしき思ひを少うせり、其時初めて先日來の紳士は神戸教會の奥江清之助様なることを聞き知りたるなり、

其以來三姉のめぐみに因り牛乳をいたゞく事となりたり、心樂しき日は幾つかくり返さるゝうち奥江様は川本醫師と共に來られ申さるゝ様病院に入れたく思へど其れにては誰れか一人附添はねばならぬ故此方が診察下さるれば全治するものならばよくなるべしとて奥江様手傳ひ給うて診察を受けたり、川本師宣ふ様もはや斯くなりては今更詮なし、只精力をつける爲めの藥を與ふべし、しかし又若きこと故節々のゆるみがつかぬ共はかり難ければとて歸られ藥はいか程にても與へんと云はれたれど急に効果も見えざる事故心苦しくいくばくも無くして藥は廢したり。

烏婆玉の闇は明け望みある曙色はやゝに現はれぬ、よき事はしばしにて消え失するこれまでの例はしに馴れて久しく世にも人にも捨てられし日蔭の萎れ草と自ら怨み啣ちたれど恵み深き神は捨て給はず

愛心あつき人を送りて救の道を示めしたまへり「今は救ひの日なり」實にや神のみ救ひなくばいかで暗黒と涙の痕の外にもなきわが経歴に光明を生じ、楽しく望みある新らしきペーヂを繰り初むるを得べき、思へばいかなる言葉をもて感謝を捧ぐべきやも知らざるなり。

楽しいきは讀きぬ、奥江様は聖書讚美歌にまたわかり易き書等賜はり、讀み聞かせ給ひしは路加傳十章なりしと覺えたり、其れより小野姉おとなひ給ひ、谷口氏も來り給ひ聖書を披きて「何事も思ひ煩らふ事勿れ、たゞ毎事に祈禱をし、懇求をし且つ感謝して己が求むるところを神に告げよ、神より出で人の凡て思ふところに過ぐる平安はキリストイエスによりてまもられん」(腓四〇六、七)と勧めらる、當時妾の心にては神様を矢張り從來の八百萬の神々と云へる如く思ひたるにて聖書も亦餘りに意味の固く解し難きに多く披き見ず、只大切なる聖經のたぐひ

と思へば手摺れするを恐れて枕邊近う飾れるのみなり。

其後又飼場の都合により轉宅せねばならぬ事になり現今の上澤通に移りしが、奥江様は御多忙なるに係はらず絶えず尋ねたまひて聖書は讀み居るやと問ひ、其こかしこ讀みきかせたまひたり。

さるがうちに妾が心長閑になり格別爲す事もなき折柄なれば、かくの如きこと果してあるか無きかを知らんとて日々に聖書を究れり(行傳七〇十一)と云ふはわが一の課程とはなりぬ。

「聖書はみな神の默示にして教誨、督責又人をして道に歸せしめ、義しきを學ばしむるに益あり(提後三〇一六)

「この書を録せるは爾曹をしてイエスの神の子キリストなることを信せしめ、これを信じ、其名によりて生命を得させんが爲めなり(約二一〇三十一)

「なんぢ我目をひらき爾曹のうちなるくすしきことを我に見せたまへ(詩百十九〇十八)

「聖言うちひらくれば光を放ちて愚かなるものをさとからしむ(詩百十九〇一三〇)

實に尊き聖言にたがはざるなり。

「それ人の見ることを得ざる神の永能ど其神性こととは造られたるものによりて世の元始よりこのかた悟り得て明らかに見ゆべし(羅一〇二十)

「もろくの天は其榮光を彰はし蒼穹はそのみ手のわざを示す(詩十九〇一)

次第に神はたゞ獨一にていますことと又天地萬物の造物主なることも解るに至りて猶ほ學ぶところあらんとせり。

奥江様申さる、様人は皆罪を犯したるものなればこれまでの惡しかりしと思ふ事は悉く神のみ前に白して悔い改めねばならぬなりと、されど妾は自己の罪あることを覺らざりしをもて神を信する念はあれど罪を悔ゆる思ひあらざりしが猶ほ讀み且つ考ふるうち、聖書は次第に光を放ちて神の恵み基督の愛を知らしむると共に我罪科をも覺ふるに至り、これまでの惡しき行や罪の思ひは歷々として胸に浮び出で日ぬもす夜もすがら思ひ出で、は消なん思ひもするを如何にせば宥さるべきやと涙ながらに神のみ前に詫ぶる思ひはすれどなかく、赦されたりと自ら覺ふる思ひはせず、神を知らざりしうちにこそ却て心安かりしものと思へど、今は忘るゝにはあまりに瞭らかなる罪を覺え、わが罪我を攻めて心苦しき云ふべき様もなし。

「そは人みな罪を犯したれば神より榮をうくるに足らず、たゞキリス

トイエスの贖あがなひによりて神めいの恩めぐみを受けいさはなくして義ぎとせらる

、也（羅三〇二十三、二十四）

「罪あだひの價あたいは死しなり、神たまものの賜たまは我われら儕らの主しゅイエスキリストによりて賜たまはる
永かぎりなきいのち生ななり（羅六〇二十三）

「これ罪つみの死しをもて宰つかさどれるが如めいく恩めぐみも我われら儕らの主しゅイエスキリストによ
りて永かぎりなきいのち生なに至いたらしめんが爲ために義ぎをもて宰つかさどれり（羅五〇二十一）

「工はたらきなく神かみに義ぎとせらるゝ者ものの幸さい福はひなることは正ただにダビデがいへる
如いし曰いはく其その不ふ法はふを許ゆるされ其その罪つみをおほはるゝ者ものは幸さい福はひ也（羅四〇六、七）

「我われら儕らもし我われら主しゅイエスを死しより甦よみがへらし、神かみを信しんせば同おなじく義ぎとせら
るゝことを得うべし、イエスはわれわれの罪つみの爲ために解わたされ又またわれらわれらが義ぎ

とせられんために甦よみがへらされたり（羅四〇二十四、二十五）
「そは若なんぢし爾なんぢ口くちにて主しゅイエスを言いひあらはし又また爾なんぢ心こころにて神かみの渠かを死し

より甦よみがへらしゝを信しんせば救すくはるべし（羅十〇九）

「その子こイエスキリストの血ち凡すべての罪つみより我われら儕らを潔きよむ若もし罪つみなしと
云いはゞみづからを欺あざむけるにて眞まこと理ことわれらわれらにあるなし、もし己おのれの罪つみを

認あはさば神かみは信まこと實ことなる公たがひ義き者ものなるが故ゆゑに必かならず我われら儕らの罪つみを赦ゆるし諸すべて
不よ義ぎより我われら儕らを潔きよむべし（約壹ノ一〇七、八、九）

斯かくの如ごとく悔くい改あらためて信しんじなば凡すべての罪つみは赦ゆるさるゝなりと信しんじてや
、安あん堵ごの思おもひせり。

こゝに悲あはしきことははからず慈じ愛あい深あきみ目めに見あ出いされてわれわれに新あた
らしき生しやう涯がいに入いらしむべく導みちびき助たすけ給たまひたる奥おく江え様さまはこたび千ち葉は縣けん
へ赴おもむかるゝ事こととなりて訣わか別かれに來きられぬ千ち年ねんもと思おもへるものをたゞ一ひと
歳とせばかりにてかく別わかれねばならぬ事ことか、別わかれなば又また逢あふや逢あはぬや計はか
り難がたからんと思おもへば悲あはし胸むねにこみあげて挨あ拶さつすべき言こと葉はも出いで

を氏は猶ほねもごろに申さる、様われかの地に赴くとも教會の方々に頼み置きたれば尋ね下さるべしとて我家の番地を叩へて歸られたり、妾は病床より強ゐて首のばしつゝ見ぬすなるまで見送りたり。されど神は奥江様にかへて丸井姉を給ひたり。

あゝ實に感謝すべきは此老姉にして永の日月を一日の如く我子の様に愛しみいたはり給へば我も亦母の如く慕ひまつり、今日は尋ね下さるやど心待ちに待つなり、其頃は未だ知るべの人も少かりつれど、住納姉と丸井姉のみは絶えず尋ねたまひしなり、妾が二十二歳の年もこゝに暮れぬ。

第八章 新生涯 受洗—文字書く業—幸福なる妾

只芥種程なるわが信も滞りなく生ひ立ちて翌くる明治三十三年三

月三日の聖安息日洗禮を授かること、なり午後九時過ぎ人見牧師を始め八名の兄弟來りたまひ隣家より三名の方も臨まれて此處に聖なる水の注ぎを受け、これまでの汚れのすゝぎ去られたるを難有き

「我儕この約束を受けたれば肉と靈のすべての汚れを去りみづからを潔くし神を恐れて潔き事を成就すべし(哥後七〇一)

「爾曹贖はれて先祖より傳はりたる徒しき業より離れしは銀や金の如きくつる物にあらず、疵なく汚なき羔の如きキリストの寶血に由れることを知ればなり(彼前一〇一八、一九)

「それ神は生みたまへる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へりこは凡てかれを信する者に滅ぶることなくして永生を受けしめん爲めなり(約三〇一六)

「凡ての預言者もおほよそ彼を信する者は其名によりて罪の赦しを

受くべしと彼につきて證せり(徒十〇四三)

「すべて父の我に賜ひし者は我に就らん、我に就るものは我かならずこれをすてず(約六〇三七)

げに妾の如き卑しき者をも洩らさで救ひたまへる神の恩基督の愛こそたとへ難けれ、妾は此歡喜を奥江様のもとへ書き送りたく思へども既に五六年來一字も書き得ざることもなれば如何せんと當惑したれ共何卒して書かばやと今は既に歪みて自由の利かざる指に筆を挾ませて書き出すに不思議なることには今まで一字も動かざりしに其日に限りて兎に角に筆は運び得るにこれひとへに神の恵みに依りて文字書く事を許されたるなりと猶ほ一行書きては祈りつゝ遂に書き了へたり、聖書に依れば三十八年病みたる者さへ癒され又ラザロの如く死にてすでに四日経たるをさへ甦らされたる程なれば全能なる神の

いかで我病を癒し能はざることあるべきされど妾を此儘に置き給ふは必ず深き思召しある事なるべし、妾は以上述べ來りたる如く賤しき仲居奉公を爲し居りたる程なれば、身を飾るをたゞ事とし、榮耀榮華を望みて喜びとしたれば全快せば又元の心になりて貴き魂さへも亡ぼすべきを憐み給ひ、斯くて數限りの苦勞を授け空しき世に頼むべきもの無く、肉體の果敢なきものたるを悟らしめ、唯神により頼み眞の自由と靈の欣喜をあたへんとて此貧困と疾病とを與へたまへるにこそ、さればこの病は妾に於ける幸福にして聊かも憂ふる事なかるべきなり、過ぎ越し方を思ひ出づれば、かの大阪に赴き、姫路にさすらひ又西大寺に捨てられし時なほはげに危うき淵に臨みたるなり、今一步を過まらば濁りは妾の身にも魂にも及ぶべかりしに、神は妾が手を把りてこの魔窟より遁れしめ給へり、あゝ妾其時若し浮れ女の類となり居りし

ならば今日の救ひを受くること能はざるのみならず、數多の人々の妾の爲めに放蕩をし或は家を壊し妻子を泣かしめたるならん、其時妾の心に忌み厭ふ情を起さしめ、危うき場合を逃げ出したる時も守護のみ手を添へたまひしめぐみなり。

妾が且て願ひたりし、氏無き身に玉の輿にのるべき希望は叶はざりしも、幸福なる哉何の續なくして天つ聖殿に入るを許されぬ、妾は世に無くて叶はざる一つのものを得たり、肉に従ふものは肉のことを思ひ、靈に従ふものは靈のことを念ふ、肉の事を念ふは死なり、靈の事を念ふは生なり安きなり(羅八〇五、六)

三味を弾き酒をすゝめたりし手は今潔められて神の恩恵を録すべく許され、流行歌を唄ひ、冗談を口走りし唇は今讚美の歌を捧ぐるを得時には偽りを畫策たりし胸は今祈禱の思ひにて充つるなり。

「我爾曹に告げん神はよくこの石をもアブラハムの子とならしめたまふなり(太三〇九)

「神の智と識の富は深いかな、其法度は測り難く其踪跡はたづね難し(羅十一〇三十一)

「されど今罪より釋されて神の僕となりたれば、聖潔に至るの果を得たり、且其終は永生なり(羅六〇二十一、二十二)

一念茲に至ればたゞ感恩の涙にむせぶのみ。

さて奥江様よりは驚きの返書來り、妾の手にてかく文字かくことを得たるかに大に喜びたまひたり。

其年六月父は不圖病に罹り追々悪くして床に就かれたるが、妾は心堪へ難く、若しも永引く事ともならば如何せん、妾既にかく病床にあれば何一つ生計の助けも爲し能はず、更に又若し死に給ふ事もあらば

如何にせんと思ひたれど「何事も思ひ煩ふ勿れ」どの聖言を堅く信じ夜も日も只祈禱をなしたり。

「それ信仰より出づる祈禱は病者を救ふべし、主これを起さん(雅五〇

十五)

「夕に朝にひるに我なげき且かなしみうめかん、エホバわが聲をき、

たまふべし(詩五五〇一七)

聖句にたがはず弱き妾の祈禱をも聞こしめしてにや少しくはよき方になりぬ。奥江様にも詳しく事の由しるして神の恩によりて快方に向ひたる旨報せしに、氏は妾に神の恩をあきらかに覺ふる様なりしを喜ばれ又父の病院へ通ひ得る様にとて多額の金を送り下され、其後も助けたまひぬ、これ亦神が憐みて慈悲深き人を以て此危急を救はれたるなりと父にも語りて涙に感謝せしが、茲にまた親戚ながら彼は富み

我は貧しきどころより、本家の父に且ては恩を受けたるに係はらず久しく来る事なかりしが、先祖の事を取調ぶるに付尋ね來りたるに不圖父の病めるを見兼ねて金米の助力を添へたることもあり、又少し以前妾の事が又新日報に出で、後に慈善新報に記されたりとて世の慈善家より恵みを受けたるも少からず、かくして父の病の間はさまじく、法をもて神は無くて叶はぬものを與へ父の病を養はしめたまひしめぐみのかくも深かるかと感謝をさへげたるなり

「爾曹の父は願はざる先に其需用物を知りたまへば也(太六〇八)

「爾曹先づ神の國と其義とを求めよさらばこれらのものはみな爾曹に加へらるべし(太六〇三十三)

第九章 樂しき數く

雨の如き同情―再び恩人に見ゆ―宮まうで―十三年ぶりに恩師に會す

感謝のうち、暮れ希望を以て迎ふる年月も、稍々重なれば、妾が受くる大方のあつき同情の忘れ難なき節、と折々に感じたる聖書の句を綴りなば、限りもなきことなれど、猶ほ其二三を日記の中より抽きて置かんと思ふなり。

わが教會の人見、牧師の郷里に歸休したまひたる後、森本様を得て度々あつき御訪問を受けたり、猶ほ丸井住納諸姉の妾の事を語り給へば、追々に同情ある愛兄姉を數多得て喜ばし、此上もなく又方々より賜はるものにて、妾は不自由することもあらざるなり。

翌年一月は、じめつ方武田牧師のわが教會を牧し給ふこととなり、着きたまふや早速尋ね下されたり、同師は曩に日向におはせし時も、此處を過ぎて妾の事を聞かれ尋ねたまふ筈になりたるも、船の都合にて會ふ能はず、後かの地より教會へ送られし書のうちに、同情を表すとあり

たる由にて、一方ならぬ御厚情を以てしばしば訪れ慰めますに、妾は尋ねたきところを問ひ知らぬ文字を教はりなせしつゝ、猶ほ今日に及べらるなり。

其年六月中旬、奥江様御用ありて此地へ立寄り給ふ由書面にてしらせられたれば、大に喜び待ち居たるに、約束違へず來ましたり、其日は安息日にしては、や夕方近く、急ぎて東京へ歸らるゝなれど、猶ほ發車まで、に神戸教會の集ひに出でたまふ由なれば、語るひまは少かりつれど、滅びんとするわが生命をかの人によりて主の救拯に導かれ、永生を得しことなれば、今更に深き恩人をまのあたりにして、嬉れしさ禁じ難く、神に感謝を捧げて別れたり、妾も蒔かれたる種の一粒なれば、何卒よき實を結び、主よりも奥江様よりもこの聖言を受くるに、いたらずば止まじとぞ思ふなる。

「我子たちの眞理を行むをきくにまされる大なる喜樂は我になし(約

參一〇四)

「よき地に蒔かれたる種はこれ教を聽て悟り實を結ぶこと或は百倍

あるひは六十倍あるひは三十倍する者也(太十三〇二十三)

光陰に關守なくはや其年も暮かたとなりクリスマスは近きぬ、いわ
けなき小供は更なり大人と雖指折り數へて待つ日なれば、病床の妾
が心さへ何となく浮立つめり、思ひ起すは幼き時祖母の手をひきて行
きたることもあれど今は道さへ忘るゝまでなりたるも神のみ恵みに
よりにて宮に集ひ得べきこともあらば其夜眠に就くとも心残りは更に
なしと思ひ入り、み心になはし求めて得ることあらざるべしと思
へば日に夜に其事を祈りつゝ、又父にたのみ母に求めつ來る聖誕節に
連れ行き給はんことを願ひたるに、餘りに切のわが言に母も連れ行く

べしどのたまひしかば欣び勇みて其日の來るを待ちたるに、生憎にも
當日は空かき曇りて今にも降り出でん模様なるに、廢めては如何にと
の事なれどそをまた押し願へば父母も止むなく妾を抱きて俥に乗
せ膝の上に夜具枕を載せて行く程に雨は幌に降りかゝり初めぬ、やが
て教會に着けば丸井卯三郎濱谷理吉郎の兩愛兄右左より母を助け妾
を昇きて二階へ上げ其處に横はらせ夜具を着せかけ枕させ給はりぬ、
枕のまゝつくづくどこの壯麗なる盛會を目前に見、十三四年前のこと
いも思ひ出で、懐かしども懐かし、あゝ妾が願を叶はせたまひし神の
恩のいかに深き事よ、歩めざる身にこの樂しき集りに列ることを得し
を思ひ溢るゝ涙のうちに感謝をぞ捧げたる樂しきうちに更たけて其
夜の祝會も了りぬ、いふせき家にかへりともなくいつまでも斯くてど
思へどさてあるべきにもあらねば、山中健次兄母と共に昇き下し給へ

ば岡本春姉夜具枕を持ち下し賜ふ、かく愛兄姉の御かげにて横さまにしぶく雨の中をも厚き注意にて無事歸る事を得たり、妾何の績もなく肩身狭き身なるにも係はらず愛する兄姉は偏よることなくかく厚き手扱を受けたるを後のおもひでにもど記し置くなり、また攝理は妙なるものにて其夜雨に濡れたる上に風に吹きさらされたれば翌日身に障りもやせんと思ひたりしも格別の事も無かりしもたへなる守護ありたればこそ。

み恵により不圖筆とる指のはたらきを許されけるより病床の不自由さを慰めらるゝ事多くもとより歪み勝ちの文字なれど神の賜を感謝するにつけ更に遠き夜學會時代の事胸に浮び來ては先生方の只ならぬ御恩を思ふなり、されば世にあるうち一度残り給へる師の君に見え御禮申上度く思へる旨をいつも武田牧師に語らふに牧師様も如何

にもして會はしめんど心掛けられ丸井老姉も力を添え只臙げなる昔をたよりに探し下されしが、やがて御盡力によりてあくる年の二月中ころ昔し學びたる友の半田まさ木村とみの兩姉をして訪はしめ給ひぬ、二人の方の入り來られたるを見るより妾はなつかしさ嬉れしさに泣きて云ふべき言葉を知らず友も同じく涙に咽びてしばし無言なりしがやがて遠き昔を語り合ひ早速先生の消息を尋ねしに其中の矢野先生は今神戸の孤兒院に働き居らるゝとの事なりし、さて其由丸井姉に頼みし甲斐ありて先づ先生の令弟の訪ひ來たまひし嬉しさ云ふばかりなく長々と語り聖前に感謝を捧げて別れ少し日経ちて先生來たまひぬ、其少し以前給ひし書面にも昔しと姓が違ひ居る故思ひ出せずとありしが逢ひての後も不思議の面持にて「あなたが愛子さんですか」と繰りかへされたる程にして變り果てたるわが身を忘れ給ひしもこ

とわりなり妾は十三年前の御禮を述べつゝ、更らにわが再びあふ日あらしめ給ひし神のみ恵みと尋ねよさらば逢ひ門を叩けよさらば開かるゝことを得ん(太七〇七)と教へ給ふ聖言のたふとさを更に身に泌みてぞ覺ふるなるげに生命なりけり、恩恵なりけり。

第十章 潮の光

わが苦痛とわが感謝―靈夢―將
來の希望―讚歌―

初めて奥江様の妾を見給ひし時は、床の廻りは蕙にて圍ひ肩の抜けし寝衣に包まれ、はさみし髪は徒らにのびて蓬の如き頭とす、けし顔をうすき蒲圓の中より出し加ふるに涙にのみ暮すになれて憂を含み居りし様はまことに非人の徒と少しも異るところなかりつらん、たへば泥沼に溺れて悶ふるを己が身に汚れのしみの着くをも厭はで手をさしのばし救ひたまひし如く、氏も由緒も知れぬ貧の家に厭はず訪

ひましたるなり、他の愛兄姉も亦かくの如く爲し給ひたり、武田牧師來ませしより程なく一同よりとて新らしき夜具建具をたまひ、丸井氏よりも亦夜具を横河姉より着類を岡本姉其他の方々よりもさまざま、戴きて今は暖かくふくよかにして病床に安臥せり、更に心につきせぬ平安を得て日々楽しく暮らす様になりこれまでの憂ひは歡喜と變じ、感謝して日も夜も神の聖約を思ひて暮らせる身の幸福はた他にありや。妾の身は先に述べたりし如く關節固くなりて屈折し難く、座ることもし立つこともはた寢がへりもならずたゞ右向きに臥したるのみなれば不自由と云は、云ふべけん、されど靈の自由はかぎりなく、只天つみ國を臨み信仰の道より離れざらん事これわが願ひなり、若し右の手罪に落さばこれを切りて捨てよ、そは五體の一つを失ふは全身を地獄に投げ入れらるゝよりはまされり、とはこれ此處にあらずや、たゞ悲しむ

父は年毎に齡傾き家はもとの如く貧し、もし父が世を去りて妾の後に
残ることどもならばいかにすべきと思へば心痛みに堪へがたきも我
爾をすて、孤子とせず(約十四〇十八)とある約束を信じ神にまかせて
一日の苦勞は一日にて足れり(太六〇卅四)となすげに神様を知りて後
の心丈夫さはこれまでの「取越し苦勞」と云ふものゝ如きを思はしむる
に違なからしめたるなり。

「われ乏しきによりてこれを言ふにあらず、われ如何なる状に居るも
それを以て足れりとする事を學べば也、われ貧賤に居るの道を知りま
た富厚に居るの道を知り飽くことども飢うることども豊ことども歎しきこ
ども諸ての事に於て我これを熟練せり(腓四〇十一、十二)

「我意ふに今の時と苦しみは我儕に顯はれん榮に比ぶへきにあらず
(羅八〇十八)

「キリストの愛より我儕を絶らせんものは誰ぞや、患難なるかあるひ
は困苦か迫害か飢餓か裸裡か危険か刀劔なるかされども我儕を愛し
める者によりすべてこれらのことに勝ち得て餘りあり(羅八〇三五—
三七)

「エホバのおのれを怖るゝ者をあはれみ給ふことは父が其子をあは
れむが如し(詩百三〇十三)

「我儕が受くる凡ての患難の中にも我に慰め満ち、悦び餘りあり(哥後
七〇四)

「われ苦しまざるさきは迷ひ出でぬ、されど今は聖言をまもる——苦
しみにあひたりしは我によき事なり、これにより汝のおきてを學び得
たり(詩百十九〇六七—七一)

「哀しむものは福なり、其人は安慰を得べければ也(太五〇四)

「忍びて試誘を受くる者は幸福也、そはこゝろみを経て善とせらるゝ
時は生命の冕を受べければ也(雅一〇十二)」

妾はこれまで天理教もき、又黒住教も聞き又信じたり、されどま心
より信賴し能はざりしが眞の神を得て表面にはあらで心の底より信
仰は湧き出づるなり、げに形のみの偶像には形式のみに拜したるなれ
ど神は靈なれば我も亦靈と眞をもて拜せずては止み難きなり、此み教
へ信じて後も悪魔は妾を試みに來り、或は聖天を信せよなどさま／＼
誘へど今は妾よりさるやからに進みてみ教を聞かし遣らんと思ふま
でに至りぬ、奥江様によりて種を蒔かれ、他の愛兄弟によりて水注がれ
而して神のみめぐみによりて育つ、これに聖意のこもるもの無くして
あるべき希くはみ旨に協ふ實を結ばん哉、妾は教會に行く事能はねば
み教に付て學びたることも少く、なか／＼人様を教ふること能はざれ

れ共此恩恵を妾一人貪るは實に心苦しき極みなり。

「いかに何を言はんと思ひわづらふ勿れ、其時言ふべき事は爾にたま
はるべし、これ爾曹自ら言ふに非ず、爾曹の父の靈其うちにありて言
ふなり(太十〇十九、二十)」

さればおほよそ人の前に我を知ると言はん者を我も亦天に在す我
父の前にこれを知ると言はん(太十〇三十二)」

妾受洗後一年ばかりきさらぎのはじめつ方妾深く眠り居たるに主
の十字架にかゝり居たまふみ姿をさやかに夢みたり、み顔は明らかに
仰き見る能はざりしが、身の丈高く赤裸々にて首をうなだれ靈は既に
天にかへり居るさまなり、兵卒共釘ぬきを持ち來りて手足の釘を抜き
抱きおろして下に置きたりと見たるまでにて覺めたり、妾つく／＼惟
みるにこれ普通の如き夢にあらで正しく靈夢なるべし、かのペテロが

見たりしと云ふまぼろしの如く深き意味のこもれる事ならん、奥江様
よりのみふみの中に夢にも神様と主キリストを見て暮らせとありし
より夢にだに見ゆること叶は、いかに嬉れしからんと思ひつめたる
故かゝる靈夢にあひたるにやあらん

思ひ寐の夢に見えし救主

めさめて後もたふとかりけり

「其十字架をとりて我に從はざる者も我に協はざる者なり(太十〇三
八)

「主はわれらの爲めに生命を捐てたまへり、これによりて愛と云ふこ
とを知りたり(約壹ノ三〇十六)

「それ十字架の教は亡ぶる者には愚かなるもの、我解救はるゝ者には
神の能たる也(哥前一〇一八)

思ふにこれたどへ病床にありとても能ふかぎり力を盡して十字架
の教を人々に告げよとの事なるか、又は主の御身にも十字架あればい
かなる時にも堪へ忍べよとの事ならんかと思ひ、いづれにもせよ大切
なることなれば自ら謹しみてさまゝなる思ひの出ることあり
さもあらばあれ、妾自ら何を云ふべきや、我が唇わが筆述ぶるところ
を知らざるなり、以上ありのまゝを書きつゝりしは自己の恥を現はす
様なれど厭ふべきにあらす、浮き沈み七度と云へど只七たび八度の事
にはあらじ、二十幾年艱難辛苦の海に乗り出し、餘波猶ほ荒ぶる日こそ
はあれ、暗き夜は明けて今は恵みの光に照らされつゝ、あればもはや何
の恐怖もあるなき也。

神の榮を彰はすは傳道の爲めとて執るわが筆はた、わが唇にはあら
でキリストの愛、神の恩恵に居るべきわが信とわが望に外ならざらん、

「望みて欣び、惱みに堪へ祈禱を常にし」とあるは正に妾の最大の課程に
あらずや、日蔭の草に等しき妾が身に於て然り、ましてこれを讀み給はん
兄弟たちはますく、信を熱うし給は、恩恵と平安を得たまふこと妾
に劣り給はんや。

「爾の我心に與へたまへる歡喜はかれらの穀物と酒とのゆたかなる
時にまされり(詩四〇七)

「我たましひよエホバをほめまつれ、其凡ての恩恵を忘るゝ勿れ(詩百
三〇二)

「生けるかぎりはエホバに向ひてうたひ我ながらふる程は神をほめ
うたはん(詩百四〇三三)

「爾その訓諭をもてわれを導き、後また我を受けて榮の光のうちに入れ
たまはん、爾の外に我誰れをか天に持たん、地には爾の外に慕ふ者な

し(詩七十三〇二十四、二十五)

唯獨一のかしこき神に榮光限りなく、イエスキリストによりてあら
ん事をアーメン。

惠の光
伏屋の曙

韻文の部

目次

感謝 感恩感謝

病中歡歌

信せよ！信せよ！

告白 我主をたのまん

基督に倣はん

眞理眞道

獎勵 御聲に應せよ

警醒歌

福音數へ歌

祝 聖誕節祝歌

献堂の歌

消息

小兒献堂の歌

婚姻祝歌

二十世紀恩惠數へ歌

小松の榮

きさらぎ月

本間氏の移長紀念に

春雨の夜

久しく旅にある友の故郷に歸るを送る

病める友を思ひて

未見の友に別を惜みて

同病の友に

別 救世軍の友の送別に

悼

牧師を送る歌

青年の友を悼みて

故丸井七造氏の紀念の會に詠す

故大和田姉の紀念に

導きつゝあり友の逝しを悼みて

雜

忠魂堂慈善會の孤兒の爲めに

撫子

○感恩感謝

神にたよらで

おのが身を

ひたに恃みし

おろかさよ

病みての今ぞ

さどるなる

恃むべきかは

神のほか

深山がくれの

埋れ木と

よし朽つとても

いとふべき

天の園生に

とこしへの

しほまぬ花と

香ひなむ

げにも嬉しや

うつし身の

感恩感謝

罪の快樂の
 おどりたかぶり
 神をたのしむ
 數のうきふし
 中にも神の
 此みめぐみを
 なやめる友に
 かすくや
 うち忘れ
 身となりぬ
 わづらひの
 惠みあり
 ひめをか
 わかちて
 二

病みふして歩み得ぬ身の嬉しさよ
 道ふみ迷ふうきしあらねば

○病中歡歌

八年あまりを
 儘ならぬ身を
 枕をひたす
 乾くひまなき
 千鳥啼き立つ
 すさぶ嵐の
 ある甲斐もなき
 漕ぐ櫓も絶えぬ
 漂ひつゝも
 病みふして
 かこちつゝ
 わが涙
 沖の石
 荒磯に
 苦をあらみ
 身を乗せて
 捨小舟
 聲あげて
 三

病中歡歌

かぎりには叫ぶ
哀れみまして
救ひの舟を

心 ね を
エ ス 君 の
寄せたまふ

罪のやまひも
心安けし
天つみ國の
み顔見る日の

いやされて
行くさきは
父のもど
樂しさをよ

○信ぜよ信ぜよ

五十三の譜

昔、今のちも
父なるみ神の

變らで在ます
み聲聞かずや

折 信 せよ
返 信 せよ
し 信 せよ

信 せよ
救はれん

名利も寶も
死になば罪故

此世に消えて
魂は亡びん

山なす黄金も
救拯は十字架の
罪のはだしをば
み救ひの御座に

あがなはるべき
血しほあるのみ
とく斷ち切て
來れもろ人

信ぜよ信ぜよ

○我主をたのまん

二四五の譜

罪故にほろぶ
ひたすら救ひの

あやうき我身は
我主をぞたのまん

親しき友すら
かじりなき愛の

反く時あるも
我主をぞたのまん

悩みの時にも
慰めたまへる

憂ひおそれじな
我主をぞたのまん

死の暗迫れる
生命の主なる

いまはの時にも
我主をぞたのまん

○基督に倣はん

一七四の譜

罪のうき世に
汚れにそまぬ
濁り江に咲く
我はならはん

住みながら
清けさは
はちすの如し
キリストに

悪魔いざなひ
悩みわづらひ
ひるまぬ心
我はならはん

うゑかわき
攻め來ども
巖に似たり
キリストに

尊き身もて

へりくだり

基督に倣はん

そむける者も
仇人すらも
我はならはん

世のあざけりも
凡べてをすて、
日毎十字架を
我はならはん

往來の人々
汝がふめる土も

○真理眞道

見すてすに
憎まて愛す
キリストに

いとふべき
かへり見す
背になひて
キリストに

しばしき、ね
あふぐ空も

世界にあらゆる
造りて続べさす

土木や金石
造りし像の

み姿見えねど
心のひめごと

神の御姿に
清きもみ神に
善悪正邪
本心は御神の

真理眞道

森羅の萬象
神を示めさむ

人の手もて
神にあらす

我等が念ふ
みな知ります

肖しわれらは
似るべきなり
わきまへ知る
律法なるぞ

九

律法に反きて
死になば魂
亡ふる我等を
神の子エスは

罪を犯し
亡ふるなり
棄て給はず
世に降り

イエスキリストは
十字架にかゝりて
寶血は我等の
十字架の外には

罪なき身に
血を流せり
罪を潔む
救ひあらず

信せよ人々
亡びをのがれて

悔い改め
永生を得よ

神は欣びて
現世來世も

罪をゆるし
汝を守らん

○御聲に應ぜよ

再敢なる水夫の譜

いかにわが友仰ぎ見よ
荊の冕冠戴きて
苦しきみ聲うち揚て

十字架の上にエス君は
から紅の血を流し
我かわくどぞ宣はず

眼は閉づれ共み姿は
耳は掩へど其み聲
われ渴くどの其み言

心のうちにうつりつゝ
心の底にひくなり
これはた誰に宣ふや

御聲に應ぜよ

八百重むら立つ雲のごと
事どもなさを斫り拂ひ
ヤコブの井戸に水汲みし
起てよ主にある同胞よ
清水にまざる魂の
愛の手引に導きて

圍み寄せくる敵の中
劍の林くゞりぬけ
三人の勇士何處ぞや
ヤコブの井戸は遠く共
罪に亡ぶる人々を
渴ける君に參らせん

○ 警 醒 歌

ジョーザマーチの譜

愛する日の本美はしく
雲井に聳ゆる富士の嶺
さゝ波静けき琵琶の海

濁るは罪の淵

眼をさませ國の民
烏婆玉の夜は明けぬ
生命の泉に身を洗ひ
清くなれよ人

罪の泥水世にあふれ
銀行たふれて富は消え
信用やぶれて名はすたる
いたましき様や

悪魔の手だての酒と色
 魂酔うて家のつぶれ
 妻は病み臥し兒は餓うる
 いたましき様や
 學校生徒のストライキ
 師弟の道さへ繁れはて
 教への根石動くなり
 いたましき様や
 不道不徳は國にみち
 み國を思へる人いづこ

見よ東洋の邦々を
 いたましき様や
 時は來りぬ今ぞ來ぬ
 神のみ恵みいとたへに
 エスはみ國を潔めます
 來れ同胞よ
 神の恩愛かぎりなく
 千島のはてより臺灣に
 救ひは普くかゝりけり
 來れ同胞よ

○福音數へ歌

羅十〇十七 一ツミヤ 人々來りてヤソ教の 福音を
信じて話を聞き給へ 救はるゝ

創 三 ニツミヤ ふたりの男女はアダムエバ 大神に

背きてみ國を追ひやられ さまよへり

母前十六〇 七 三ツミヤ み姿見えねど力ある 神様は

心の底まで知り給ふ 恐ろしや

羅六〇二三 四ツミヤ 慾より孕みし人の罪 いや増して

終には生命を失ふぞ 哀れなる

可八〇三四 五ツミヤ 如何なる難義に會ふども 主に任せ

十字架になひて世をわたれ 人々よ

耶三一〇三 六ツミヤ 昔も今も變りなき 神の愛

弗二〇四 深さも高さもはかられず 感謝せよ

弗四〇二七 七ツミヤ なをざる心は罪の種 つとめよや

悪魔に處を得さするな 世の人よ

申十〇十八 八ツミヤ やもめと孤兒やめるもの 憐みて

恵まば御神も其人を 愛でたまふ

羅六〇三二

九ツミヤ

心の底より悔ゆるなら 潔められ
生命のかむりを受くるなり ありがたや

傳五〇十一
一六

十オミヤ

富も寶もつかのまに うするなり
救の光はかぎりなく 世を照らす

○聖誕節祝歌

仰げや	よるづ世の
主は世に降り	たまはせり
歡びのこゑ	うちあげて
うたへ楽しき	今日の日を

楽しく頌めよ	はらからよ
われらもださば	道の邊の
小石も叫び	うたふべし
あゝ神のみ子	あれましぬ

ひとりのみ子を	世にたまふ
み神の愛に	たぐへ見て
比馬刺亞山は	高かるか
太平洋は	深かるか

恵みにそだつ	草も木も
靡さしたがあひ	かしこみて

聖誕節祝歌

津々浦々の
ひなも都も

はてまでも
おしなべて

救ひの主を
みつかひ達と
地にはおだやか
神にみ榮え

ほめうたふ
もろ共に
恵みあられ
世々にあれ

智慧にみちたる
榮えの彩なき
おぞものらが

ソロモンの
宮なれど
ひたすら

○獻堂の歌

ま心とのみ

見そなはせ

飾りあらしの

宮榮えの柱

そは細かるも

み榮えの

雲の柱の

みちびきに

迷へる人は

たのみ來ん

契約櫃覆へる

ケルピンの

厳そかなるも

無ければも

たゞみ恵みの

みつばさに

寄る雛鳥を

はぐませ

神の宮なる
 ひそめる罪を
 聖靈よとはに
 宮居ととも
 胸ごと
 追ひやりて
 新らしき
 やどりませ

常春の宮居さへげて揚雲雀

高くうたはめ神のみめぐみ

○小兒獻堂の歌

朝起きて 野邊を見れば
 青き草に 露の玉
 金剛石か はた眞珠か

たつる宮の 飾りともせん

指折て かぞへ待つ
 夢にも見し この宮居

夕出で、 海を見れば
 みどりの浪 紅き雲
 美しかる 彩りもて
 宮の壁を 塗らまほし

待わびし 宮たちぬ
 いざ歌はむ このよき日

主は始めて
 エルサレムに
 十に足らぬ
 常につとふ
 あなうれし
 友とちつれ
 十二の歳
 のぼり給ふ
 我等さへも
 この宮居
 安息日
 つとほつや

○婚姻祝歌

三八〇ノ譜

主により結ぶ
 契り久しく
 かはらぬ操
 妹と春の
 幾千代も
 連理の松の

置雪霜もいとほざれ

雌竹雄竹のなよやかに
 聖^み靈^{たま}の風の吹くまゝに
 なびき従ひみ旨畏む
 直き心の節々榮えぬ

雪間ながらに笑む花の
 うす紅梅と白梅の
 枝をまじへて香ばしき香に
 庭の清さを世に示せ

○廿世紀恩惠數へ歌

哥後四〇十 一ツミヤ 一年毎に年たけて〜

六 二 哥前七〇十 二ツミヤ 夫婦は變らぬ常磐木の〜
枯れて落つるも番ひの葉〜

太六〇廿五 三ツミヤ みめやかたちを外にして〜

約壹三〇一 四ツミヤ 心に錦を飾れかし〜
夜晝忘るな父の愛〜

詩百〇四 五ツミヤ 我も盡せよ眞心を〜
いかなる時にもつぶやくな〜

十誠ノ四 六ツミヤ 絶えず欣び感謝せよ〜
六日の間ははたらきて〜

太七〇十四 七ツミヤ 安息日をば守るべし〜
直き正道歩むべし〜

羅七〇廿三 八ツミヤ 狭き門にもためらふな〜
八重十文字にからみつ〜

路八〇六 九ツミヤ 我をしぼるは罪の繩〜
心に蒔かれし聖言を〜

一 彼前二〇廿 十オミヤ 枯らさぬ様に水を〜
科も汚れも慾もなき〜

羅十四〇八 十一ミヤ エスを手本に倣ふべし〜
生くるも死ぬるもみ心ぞ〜

來十二〇十一 十二ミヤ 敢て憂ふる事なかれ〜
苦き良薬身を癒やし〜

太廿八〇廿 十三こや 教は心の薬なりく
逆捲く波風荒き世もく

太十六〇廿 十四こや 主ともにいませば怖る、なく
四海兄弟みなくはく
四 エスの十字架を身に負へよく

哥前十三〇 五こや 五倫五常も眞實もく
一、二十 愛が無くては行へぬく

太四〇四 十六こや 路頭に餓死する魂にく
生命の糧をば賜へかしく

結十四〇六 十七こや ひどりの御神を拜すべしく
偶像死物に用は無しく

哥後九〇八 十八こや 濱の眞砂の數よりもく

羅十三〇十 十九こや 國々島々いづくにもく
一、十二 救の光はかゝりけりく

詩百三〇一 二十こや 二十世紀の新なるく
年を祝うて讚美せよく

○小松の榮

森本御愛子を祝ひし歌

たふときみ手に まかれたる

千代の小松の 稚ばえは

恵みの雨の うるほひに

常磐かきはの 色深く

しげり榮えて 八千代まで

小松の歌

神のみ榮

彰はさむ

嵐はすさび

雪つめど

みどりの色は

いや深く

かはらで立てる

常磐木の

ゆかしき操

たのみては

梢に鶴の

巢ごもり

雛よぶ聲の

めでたかり

亡びの野邊に

旅人の

そことも知らず

ぬれそぼち

ふるむら雨に

ぬれそぼち

その下蔭や

辿り來む

茂れシオンの

嶺たかく

白雲かゝる

空たかく

○きさらぎ月

神の導きによりて十三年目にもこの
夜學會の先生に逢ひたる嬉しさに感
謝の歌 明治卅五年三月十八日

恵みの聖手の

みちびきと

知らで歩める

幼な子の

夜毎にかよふ

學びやに

まことの道を

辿りつゝ

湊川原の

松風の

身に沁む宵を

たゞひとり

きさらぎ月

歌へぞつきぬ

みゆぐみや

過ぎつる去年は

鳥が啼く

あづまの都

あどにし

うつり住みけり

其里に

記念の今日を

ことほぎて

聖前に清く

うたはッや

早くも過ぎし

一年に

成したる業は

少さくも

受けし恵を

限りなき

いかで忘れん

神の愛

又來む年の

今日が日は

主にある友の

數まして

はかり知られぬ

みめぐみを

み前に高く

うたひなむ

○春雨の夜

彌生長閑けき空ながら

そぼふる雨に咲く花も

おとく露重くしほれつゝ

思ひに沈むたをや女が

笑顔さみしき風情也

思ひやらるゝ高砂の
島曲をめぐる椰子の木に
雨ふる夜半の如何にぞと
異なる方をわが胸に
深くゑがきて筆把れど

君慰むる歌よまん
才なき筆を幾度か
あだに噛みつゝ投つれど
よるこばしさの福音を
つたへむすべや無かるべき

野邊にはもゆる土筆
つたなき文と捨草の
よし踏まるとも磨る墨の
薄きながらに汲みませと
しるすまことの道しるべ

○久しく旅にある友の故郷に歸るを送る

君が來ませし如月の
梅が香夢と消え去りて
物なつかしき五月暗
花橘のうつり香の
袖にそぼふるさみだれや

久しく旅にある友の故郷に歸るを送る

更えしばかりの白妙の
衣手かろく吹かせつゝ
君は青葉の古里に
歸るときくをいつかまた
何處に會はむ縁ぞや

うす曇する琵琶の海
夏の眺めの富士の根や
名ある山川數越えて
かへらむ君が心にも
描きも見ませ津の國の

摩耶高取の嶺のびて
霞みのはては明石瀉
淡路島根の紫の
けふりこむるに眞帆片帆
歌の思ひもつきざらむ

須磨の荒磯に杖ひきし
夕を忘れまさらば
西と東にうつし身は
よし隔つとも世のかざり
後の世かけて交はらむ

久しく旅にある友の故郷に歸るを送る

さらば切なる祈りにぞ
又逢はん日を望みつゝ
つらき別れも嘆かずに
君が心とらうつし身の
まさきかれとぞ送るなる

○病める友を思ひて

見もせぬ君を思ひ草
日ましに胸に萌え出で、
はかなき花におきあまる
露は涙か春雨か

思ひ東に馳すれども
翅なき身の甲斐もなや
心ばかりにとる筆に
いざ言とはむ都鳥

花咲くとしも覺えざる
枯木わびしき冬の日の
ふる雪霜を忍びなば
又やかへらむ春の色

昨日のふちは今日の瀬と
かはるになれし飛鳥川

流るゝ水をはかなみて
夢の浮世を追ふ勿れ

天津み國にゆく旅の
けはしき道にためらへば
心にひゞく聖言葉や
『とく來よかし』と宣はす

先き立ち給ふ君エスの
みあとにつきて心さす
シオンの山の見ゆるまで
たゆまで歩め祈りつゝ

○未見の友に別を惜みて

霞がくれの鶯の
見えん折なく別れなば
いづこの空に又逢はん

心に急がく別れ路を
細く煙る春の雨
わが袂さへしめりつゝ
あはれ海山へだつとも
へだてぬ君が赤心を
風のたよりに賜へかし

○同じ病の友に

同じ病ひに腦む身の
 ふしどは遠く隔つとも
 おのづから湧く憐みの
 心のはしを受けたまへ
 問ひ慰めんすべなさに
 せめても送るはし文も
 つれづれ草と見給は
 わが喜びにはべるかし
 鏡の中のまたゝきの

その俤はうつらねど
 愛の心のきえやらで
 君が癒えん日只祈る

さらば救の主をたのみ
 険しき山路とく過ぎて
 御名に反かぬ一すぢの
 正道歩みたまへかし

○救世軍の友の送別に

三九二の譜

神の國みくにの爲め 戦ふつはもの
 常にそなへせよ 背水の陣立

救世軍の友に送別に

四十五

(し返折) 血と火の御旗
君等進め

真先に立て、
我伏兵とならん

陷せし岩をば
猶ほも進み行く

後陣にまかせて
武者振勇ましき

行けや益良武夫
いかで憂ふべき

別る、我身も
救ひの爲なれば

天地ゆるぐまで
悪魔を攻め伏せ

関の聲高く
擒を縦ちやれ

○牧師を送る歌

幾 歳 月

守られたる

牧者に別る、

羊の群

おそひあらす

狼にぞ

あるは傷つき

餌食とならん

なさけあつき

牧者の君

るまさぬ明日こそ

淋しからめ

ゆく牧者に

のこる羊

いづれか名残の

惜しからざる

牧師を送る歌

小 さ き 群 怖 る 〳 な ど
の た ま ふ 主 の 聲 力 草 に

ま た 會 ふ べ き 時 を 望 み
御 神 の み 旨 に ま か せ ま つ ら ん

○青年の友の逝しを悼みて

旅の幕屋のかりの宿
うきこと多き世の中に
さまよはせじとことばに
聖國にむかへ給ひしか

み心かくと知るからに
何か嘆かむなげかじと
思ひながらにいやまして
逝にし人を偲ばるゝ

我世にあるは主のみ爲
死ぬも我益聖意と
朽ちぬ聖徒の教へ草
稗りにあとを踐み來しが
愛の化身のたらちねの
親のなさけの厚衣

青年の友の逝しを悼みて

かさねて逢はむ其日まで
慰めたまへ天つ神

○故丸井七造氏の紀念の會に詠す

ひよどり越の道
の霜
まだき朝あしたを消えてゆく
はかなき人のうつし身の
十九つの越こし方かたつくぐと
いとゞ思ひを増田山
いつしか催ふ袖しぐれ
しぼれ共猶ほふる雨に

晴るゝ時なきうき雲
ちるや紅葉の禪昌寺
赤き心の錦着て
今はどかへる天つ國
悲しき秋の思ひ出や

山姫が織る布引の
瀧の白糸くりかへし
結ばれ解けぬ胸のあや
つなぐ睦みは後の世に
共に語らんバラダイス
しらべ床しき琵琶塚や

故丸井七造氏の紀念の會に詠す

生田の森に
一枝若木の
浮世に榮ゆる
春とこしへに
天つみ國に
香こそ高くも

生ひ茂る
枯れはて
すべなきも
久方
白梅
句ふらめ

○故大和田姉の紀念に

人のゆく末
思ひまはせば
憂きこと多き
つらさもつもる

越路方
かすくの
世なるかな
雪國と

きくだに寒く
其冬空も

身にぞ泌む
すぎ去りて

木蔭したしき
垣根に咲ける
しばしに萎む
はかなき君し
八重山遠き
隔てはあらじ

夏の日の
朝顔の
さま見ても
思はるゝ
新瀉も
おしなべて

主にある友ぞ
しばし別れの

懐かしき
切なるに

故大和田姉の紀念に

胸かきくもる	夕立の
かゝりて濡るゝ	袖たもと
晴間おそしど	たつ虹の
空や恵みの	天の彩
焼野のきゝす	夜の鶴
子を思はぬは	なきときく
父母に別れて	雛づるの
焦るゝ胸や	いかならん
春去り行きし	鴈がねも
また來る秋は	近けれど

君はふたゝび	かへり來ず
湊を出でゝ	天小舟
よるべの岸は	天つ國
たのしさつきぬ	バラダイス
雲もさらしも	及びなき
白き衣着て	おはすらん

○導きつゝありし友の逝しを悼みて

嗚呼友は逝けり	花笑み鳥歌ふ
美はしき春も	及ばぬ聖國に

鳥呼友は逝けり	足はぬ我等が
---------	--------

導きつゝありし友の逝しを悼みて

示せし聖國を

信じてぞ逝ける

嗚呼友は逝けり

願はくは我主

天門みかどを開きて

彼を迎へてよ

嗚呼友は逝けり

思はじとすれど

紀念の玉章

これを如何にせむ

嗚呼友は逝けり

はかなき人の身

明日をば頼まで

今日をつとめなん

○忠魂堂慈善會に養生する孤兒の爲めに

勇めやいさめ小供等よ

なれの父母無しとても

など孤兒と憂ふべき

稜威豊けきすめらぎの

慈愛の二字は父母ぞ

勉めや勉め小供らよ

なれは貧しく生ひ立ちて

身にはつゞれを纏ふとも

朽ちず破れず穢れなき

錦をかざれ真ごゝろに

勵めやはげめ小供等よ
 世の浪風は荒くして
 なれのあたりに寄する共
 ゆるぎもあらぬ敷島の
 大和島根の巖のごと
 ひるまぬ心雄々しかれ
 進めやすゝめ小供らよ
 如何に浮雲立ちこめて
 なれの眼は掩ふども
 眞理まことの光日の本に
 照さぬ隈なく輝けり

かゞやく光仰ぎつゝ
 愛と正義の兩足に
 人の人たる道を踐め

○撫子

鳥取なる奥江令嬢より旭光良とて貧しき者又は孤兒等の爲め慈善を
 なす會あるに歌越せよと申されしかば撫子になぞへたる歌

青葉茂れるの譜

廣きこの世に住みながら
 貧苦のためにせばめられ
 煙いふせきかりの小家
 細き手業の甲斐もなく
 うすきたつきの代しろを得て

つなぐ生命の露小袖

日々の煙もたえづくに
餓うる日さへもあり勝ちの
幸なきうき身うち唧つ
小夜の庭に啼く虫の
聲さへそひていとゞしく
朽ちたる床のわびしさよ
憂きこと多き世とは云へ
貧しく育つ孤子の
嘆きにまざるうきありや

幾千よろづの人あるも
はぐみ受けん父母はなく
誰がやさ言にたよるべき
寄るべなきさの捨小舟
かなたこなたに漂ふに
救の舟のなかりせば
海の藻屑か白浪の
沫ども成りてはつる身の
哀れと云ふも愚かなる
かゝる危うき折からに
愛のめぐみの手を伸べて

助くる人やそもや誰れ
 主のみ言葉を守りつゝ
 おのれの如くよそ人を
 愛する人ぞたのもしき
 貧しき者とみなし兒の
 さまを思へばいとけなき
 うきこと知らぬ身ながらも
 小さき胸に哀れさの
 みちてあふるゝしづく
 露をふくみし撫子の

人形買はんとつみためし
 金は彼等にわたへなん
 ひどり楽しく遊ぶより
 猶いやまさるうれしさは
 與ふる者は受くるより
 幸ひなるを知りし時

いざやはらから我が友よ
 つくすみわざはちさくとも
 神はよろこびめでまさむ
 教訓をしへの庭の撫子の
 赤き心の花咲て

惠の光
伏屋の曙

短歌の部

ゆかしの香り高からむ

目録

芥種

五十七首

傷める葦

六十九首

靈鶴

八十一首

瑞葩

六十八首

葡萄樹

六十七首

四季をりく

三十四首

○芥種

恩惠

影くらういぶせき賤が伏屋にも

恵みの光りてらすあけぼの

主の榮光

かゝやきて照らさぬ隈やなかるらむ

救の光常世ふるとも

救はれし身の欣喜を

力無く見ゆれを強し薦かつら

救ひの磐にからみつければ

神惠

病みふして歩み得ぬ身の嬉しさよ

芥種

道ふみ迷ふうきしあらねば

一疊の部屋に病みこもりて

狭くとも足る事知ればわが床も

天津聖殿みこのの心地こそすれ

病床の柱の竹に

つくづくもうきふしの世を悟るかな

わが枕邊に立てる吳竹

悔 改

あやまりて曇り無き身を曇らせて

晴る、日もやとくゆる今日かな

感 謝

何のその世の常ならぬうきなやみ

神による身は感謝とぞ成る

信 仰

信じなば救はるべしの聖言みことばは

心の耳にひびくなりけり

けはしとも救の道を辿らばや

亡びの野邊は見かへりもせで

禮 拜

病みふしてひとねの中にありぬれど

心はつとふ神のみやしろ

神 愛

世をわびて袖に泪のかゝるとき

一しは神の恵みをぞ思ふ

芥 種

聖旨

つらき世と思はでひたに聖旨を

思ふ心のいかに樂しき

祈禱

朝夕に祈る心は淺くとも

神の恵みし深くぞありける

執心

みすくひの門は狭くともいとふべき

身をつくしても入らんとぞ思ふ

勤勉

手にとらぬ心の玉を磨かばや

とはの光りをはなつそれまで

警醒

さまよひて亡びの野邊に草枕

榮華の夢を結ぶ旅人

エホバに依頼むものは幸福也

何事も神にまかさば世の中に

うきてふものはあらじとぞ思ふ

吾病床は信仰の大學校也

垂れこめて眺めぬ月の清きかな

出て見ばかゝる雲もありなむ

患難にも欣喜をなせり

我神の恵みと知ればいたつきの

うさの思ひも忘れにけり

信じて祈らば願ふまことるこそよく得べし

信ずてふ心ありせば夕たすき

かけて叶はぬ願ひやはある

聖書

世の旅は善と悪との別れ道

迷はぬ様に道しるべ讀め

汚れたる心をうつすみふみこそ

とはに曇らぬかゝみなりけれ

毎朝精讀

朝な〜むかふみふを鏡とし

梳らばやみだれ心を

聖書熟讀

よしあしは別れ道なりみちしるべ

よみてまことの道し行かばや

汝の聖言は我足の燈也

心してまことの道のしるべ見む

いつしか迷ふうたて世の旅

病む床に寐待ちの月もさし出で

迷ふ闇路の方照らすなり

道は汝に近く汝の口にあり汝の心にある

信仰の道をいづこと思ひきや

己が心の花の一輪

見ずして信するものは幸福也

山高みかすみてそれと見わかぬぞ

芥種

山の盛りに花の盛りは香にしるきかな

最早われ生けるに非ず
キリスト我にありて生ける也

朽ちぬべく見えし老木も春立てば

若木にかへりこゝに一花

爾曹神と財に兼仕ふる事能はず

二つなき一つの身もていかなれば

神と財に兼つかふらむ

馬可四ノ十二

見て視えずきゝても耳の聴えぬは

まことの道を知るよしもなき

來六ノ十九

天小舟錨おろして仇波に

漂はされぬ身こそ安けれ

哥後六ノ二

うなさるゝ罪の眠をさませかし

救ひの光汝に臨めり

約百一ノ十二、十二

清らけく澄める小川をこゝろみむ

投ぐる小石のあとや如何にと

馬太一四ノ二九―三三

我れ弱したゝ主によりて波風の

荒き浮世も安く經なまし

馬太一五ノ二八

わが望む生命の糧はエス君の

芥種

開かれし救の門を守る狗に
恵みの屑を受けば足りなむ

主よみ恵みの屑を給ひぬ

わぎはひの本を謹しみ避けてこそ

神のみたまに満さるゝなれ

鞭うたる子にもまさりて撃つ父の

み心さこそ痛み給はめ

たらちねの親のなさは旅衣

たちての後の今ぞ知らるゝ

心からうき旅空にさまよひて

古りにし里のこひしかりけり

今はとてかへるわが家はかはらねど

變りはてたるわが姿かな

あやまてり親にそむきし我罪を

悔ゆる心は神を知るらむ

さなきだに親の心の切なるに

許すわが子を人な咎めそ

草は枯れ紅葉は酔へる中にして

霜に秀づる白菊の花

萬づ代にしほまぬ花と香はなむ

みたまの風の吹かん限りは

草の書 聖母マリアのヨハネ

月出で、影消えうする螢火も

しばし暗路のたよりなりけり

草の書 聖母傳道

もしは草書けどもつきぬ恵みかな

硯の海の浅きにも似て

わが父母の救はれんことを祈りて

正道をしめし給へや天つ神

知らでまよへる父母の身に

草の書 聖誕節の感

うまふねに臥たるエスを思ひ見れば

月もる伏屋いとふ事かは

新年感恩

歩めさる身にも恵みの春はきて

心あらたになるぞうれしき

折にふれて

よしあしも名所古蹟の世の旅路

おはりて歸る天つふる里

しくくとふる雨雲の吹晴て

かゝやく光あらはれにけり

草むらにひとり咲つる花なれや

みちゆく人もかへり見るらん

天てらすまことの道を行かずして
暗きにまよふ人の愚かさ

救主を夢む

思ひ寐の夢に見えし救ひ主

めさめて後もたふとかりけり

○傷める葦

人生のはかなきを思ひて

世の中に何を望まん浮雲の

明日をいかにとたのまれぬ身の

迷

ともすれば心のまなこ旨ひはてし

まことの道を踏み惑ふかな

罪

罪のふち濁りくくして烏婆玉の

やみとぞなりぬ月の澄ますて

救の光を求む

大空にかゝやく星の光もて

傷める葦

迷ふ心の暗路照らせよ

常病人なる上に此程より心地すぐれざるに癒えん事を祈りて

堪へがたき日でりに萎む夕顔に

深き恵みの露を給ひぬ

癒えし感謝

大神のめぐみの露にうるほひて

ひらきそめける垣の夕顔

養老院の寄るべなき老婆に代りて

いにしへの姥捨山のかなしみと

同じ思ひのわが身なるかな

かゝる中にも福音をきかると幸福を思ひて

うば捨の山ならぬ世に捨てられし

身にも田毎の月仰ぐかな

盲人なる老婆をよめる

世をてらす日月の光見ゆすども

心に仰ぐ天つみ光り

世の罪の汚れしさまをみつ鳥の

いのちの川に浮ぶ君はも

大前悦子姉の歿れしを悼みて

立つ秋を桐の一片と君逝いて

むなしく置くか露の友垣

故本尾秋遊氏の遺稿をよみて

うつし世に相見む折もなかりしか

天つ世にこそ共に語らめ

傷める葦

全氏は須磨にて歿せられければ
たちかへる夕の波もあるものを

逝きてかへらぬ君のうつし身

北海道より未見の友の永眠を知らせ來る其友は三年経たば神
戸に行きて會はんなど云ひしが

何時か逢はん語らまほしと思ひしに

逢はぬ別れの今日を悲しき

上州安中にて歿りし人を悼みて

榛名山嶺の白雪とけなくに

春にえ逢はで消えし君はも

聖國に去りし一老姉の上を偲びて

今ははや世を浮草の根を絶ちて

天の園生に生ひ茂るらむ

故丸井七造氏を悼みて

うつし世にたのめし幹は枯れぬとも

かたき根さしや天に榮えむ

且て同氏の通行の節見しを限りに早世になき人となられければ

ちらと見し影は消えたる宵月の

猶なつかしき天つ空かな

いづれば會はんみ國ながら一姉妹に此世の別れをなげきて

さなきだにゆかしかりける友の身に

しばしの別れいかにかはせん

本間氏の愛子の眠られしを

塵塚の世には置かじと天つ父の

移しうゑけん撫子の花

傷める葦

森氏の御母君逝かれしを

四方山は色まだ染まぬ初秋に

母その森の木の葉ちるとは

主に在る御老母の逝かれしに

世の秋に木の葉ちるともどことはの

御園にちらぬ花や咲くらん

永年不治の病に惱める愛友の上に

曇りなき今宵の月は冴ゆれ共

胸のうき雲いつか晴なむ

昨年當地にありし病友をふもひて

去年逢ひし頃ぞなつかしきさらぎの

春は來ぬれど君は來まさず

親しき友失望の餘友人などに愛は無し」など、手紙に認められし思を汲み代りてよめる

憂き雲に曇る心の増鏡

うつるつれなの人の面かけ

上州なる失望せる友へ

張りつめし君が心の碓氷川

恵みの春にとけぬものかは

病める友の母上姉君病氣にて友の痛心一方なき由承りて手紙にそへて

病みませる母はらからを思ひます

君が心ぞはかり知らるゝ

未見の病友を偲びつる夜

日にまして君を偲ぶの草しげく

傷める葦

涙の露にうるほひぬかな
夜もすがら君を思ひて明石瀉

みちくる潮もわが袖の上

嘆きつゝ夢もむすばぬわが床の

枕にひひく曉の鐘

東國なる病める友へ

あかつきのくたかけならぬ我なれど

東の空を戀ひて泣くなり

隔たりて病める友にあひし夢

夢路とも知らであひつる樂しさを

うたてさますか曉の鐘

さる人への消息のはしに

賤の女のむすばれ勝ちの九十九髪

いふにいはいはれぬわが思ひかな

身は遠くへだてぬれども我思ふ

心は君が影となりたき

ある夜

夢にだに逢はましものと寐ねながら

あはぬまふたの如何にとやせむ

今宵しも空は晴れぬと人は云へど

我床のみや春の雨ふる

海岸に宿りける友の毒と成るものを禁じける

問もなく破りければ

うち寄する波の如くに立ちかへり

定めし心沫とならんとは

傷める葦

其友の爲に祈りて

君が爲めわれや磯邊の小夜千鳥

夜は夜もすがら泣きて祈らん

鐵毒被害地の慘狀をきゝて

哀れなるさまは見ねども思ひ川

岸うつ波もわが袖の上

浮き沈み定めなき世を渡良瀬の

流れも民の泪なるらむ

汚れの淵に沈める婦人に

泥沼の中には住むも清らけき

香りはなまよかきつばた花

同じく道をすゝめたる文のはしに

泥ぬまに深く根させる燕子花

ぬきて御園に植ゑんとぞ思ふ

見舞ひたる同病の友の逝きしを悼みて

同じ家に語りし友も世を去りて

逝にし空ぞ戀ひしかりける

逝きし友の夢を見しかば

さめぬれば名残ぞ惜しきなまじひに

夢のかよひ路絶えなましかば

病める友の遠方より來り永く此地に惱み

わが心何にたどへむ夜もすがら

ひとり血に啼く時鳥かも

涙川流れてつきぬ夜すがらは

傷める葦

むべ心さへ沈みぬるかな

悲しみつゝ祈りて

泪川流れてつきぬ時にしも

神しがらみとなりてどいめよ

危うかりける友の心地怠りければ

枯なむと見しも恵みの春にあひて

御園の松の色はえにけり

病める友を夢みて

思ひ寐にあひし夢路の中絶えて

うつゝに偲ぶ君がいたつき

亡びんとする魂のなげき

波風のあらしき浮世の捨小舟

よるべの岸はいづこなるらむ

危うき友に

櫓は流れ棹は折れたる捨小舟

救ひの舟をどく呼べや人

父のいたつきにあれど看こりしえぬ我身をかなしみて

たらちねの親のいたつき看とるべき

われも病める身あゝ如何にせむ

父の病を聞き奥江氏と本間氏との熱く祈り給はりけるに

父の病もさみに怠りければ感泣しつゝよめる

今更も熱き祈りはさかるとふ

昔しながらの恵み知るかな

妾を導き給ひし信仰の父上とも愛慕する奥江氏に久々逢ひて
直ちに別るゝ名残惜しさに詠める時は舊長月の三日なり

嬉しくもさやけき影を三日月の
仰ぐ間もなや山の端がくれ

去年の秋來し人を待ちて

歸りたる鴈も亦來る秋なれば

我待つ人もやがて來ぬらむ

遠方より來れる友の歸國にせまりけるに

昨日よりけふより明日と萎むかな

水上げかねし床の白梅

送別

かへりゆく君に名殘の惜まれて

心消ゆるか別れ路の霜

うもれ木

うもれ木と深山の谷に朽つる身は

今を春邊と咲くよしも無き

病床より長閑けき空を仰ぎて我病を思ひはた同じく病める友の上を偲びてそらるに落涙禁じがたきまき心にひびく壁忍びてこらしめを受くる者は幸也

春の野の光に浴まぬ衣手の

露けき問はれ何と答へむ

久しく來ぬ友の音信を待ちわびし夕

昨日も去り今日も過ぎぬと夕まぐれ

君がたよりをまつ虫の聲

友より時鳥を聞くこ云ひこせし時

有明の月になくかやはとぎす

見えつゝ遠き身こそかなしき

傷める葦

遠方なる病友の此頃始めしと云ふ運動のさまを偲びわたりて

涼風に袂吹かせて一人かも

此夕空を眺めやおはさむ

妾の死去せし夢を見て夢中いたく悲しみ給ひける由申越されければ返しによみて贈りける

古への卍和の玉にまざるかな

愛の涙の露の白玉

故山を出て、旅路にある義妹の心情をうつして

古里を思ひ寐にぬる床の上に

白露おくか初秋の夜半

秋の暮に歿りし人を

秋草と共に枯れにし君偲ぶ

我袖の上に露をおかるゝ

風さそふ草木にあらず人の身の

秋の別れをいかにとやせむ

亡き友の夕立の夜訪ひ給ひしを思ひ出で、

君にあひし夜の夕立の時ならぬ

今日春立ちて袖にふるかな

亡き友の紀念の衣を抱きつゝよめる

亡き友の衣片敷き寐ねやらば

一夜夢路に逢はれもやせん

五月雨のこゝろ出征の教友をしのびて

五月雨の降る夜はいとゞふる里の

戀ひしからましもろこしの友

○靈 鴿

遠方なる友へ

身は遠くへだてぬれ共通はする

文ぞ心の使なりける

薄墨に染めにし文も君思ふ

愛の真心こしと見ませよ

隔つれどへだてはあらじをしなべて

主にある友の愛の交り

殊に愛深き友のもこへ

わが友を松の操にことよせて

いつもかはらぬ愛ぞゆかしき

愛する姉妹より受けたる寫眞に

うつし畫にこわ音なしとは思はえず

君が讚美を心にぞきく

さる人へのかへし

ふる雨に身は濡るれ共濡れて行く

世の旅人に雨具かさまし

東京麹町インマヌエル教會員上杉氏の懇ろに訪ひ給はせしに
返したる書のはしに

み姿は見ねども深きいつくしみ

讀みてうれしき君が玉章

さる御老母の「病みては御身の上を思ひやる」こてみ歌賜ひしに
見舞のふみに添えてのかへし

思ひきや病みておはすときく虫の

音に泣きつゝも神に祈らん

神戸教會より召されけるに其前日も雨なりしかば晴れなむ事を
祈りつゝ

召されゆく樂しき明日の道すがら

晴の光を賜へ大神

翌晴れ其途にて流石に今の不自由なる身を悲しむ心起りければ

み光をゆたかに浴びてゆける道に

はたや暗路をかへり見るとは

集ひ得し感謝のあまり

みやしろに集ひしけふは世の中の

千々の思ひも忘れはてけり

同じごろ女子傳道學校に我を迎へ給はりければ其趣く道すがら

うれしくも恵みの御手にひかれつゝ

天つみ國にゆく心地かな

十一日が間愛姉方赤心よりもてなし又看さりなし給ひぬ。夕べ
となればベントを椽先に出して貰ひ涼しき風を身に浴ぶ

木々に鳴く蟬の音をへて吹く風に

肌すゞしき夕間暮かな

たゞ天津御國の心地せるに月さへ照らしければ

樂しくも天つみ國と思ふ身に

猶空高く月の澄むとは

やがて歸るに臨みて

いざゝらば今日は我家に歸りなむ

心ばかりをあとに残して

同じく感謝の心を

愛をもて我を慰め給ひけり

何につくさん友のまごゝる

又次の年み恵によりて再び同じまゝころに迎へられて楽しき口
を送れるとき大風雨の續きければ

おぼつかな風吹き荒み日を経れば

庭の松が枝いかに成らん

しばらくにして風熄む

吹き荒れし風静まりて庭の面の

千草にすだく虫のもろごゑ

涼しどもすいしかりけり雨晴て

ぬれ葉をわたる夕風の音

神戸教會へ赴く途上俚より海の景色の美はしきを眺む

美しや見渡すかぎり白波の

上にぞ浮ぶをちの山影

海を見しは十年ぶりなり

たれこめて海の景色も白波の

静けきさまを見るめ嬉しも

教會につぎひ得し心情を

みやしろに集ふ我身の楽しさを

願ちてしがなあゝ病める友

愛姉方に別れを告げ歸宅せんまで

初秋の諏訪山嵐背にうけて

かへる袂に露ぞかゝれる

故横田大人のいさほしを仰ぎ侍りて

どこ暗をてらす宮居を建て上げし

其いさほしをほめたゝへなむ

亡き君の紀念によめる

世をさりて逝にし君の雁ならば

また歸り來ん秋も近きに

長門秋吉村なる一兄弟彼地の同胞を救はんこ百難の中に遂に
恵みの光を浴ぶる人々の多く出ける由承り感謝の唱歌にそへ
ておくる

憂雲はみたまの風の吹き去りて

秋吉村に澄める月影

山を穿ち軌道を敷く業と共に傳道に心がけさす奥江氏に

細くとも険しき山路貫きて

千里に開けくろがねの道

本間氏の善かれと營みますを却て憚ります者もある由人より承
りて

よきわざを多くする河の富士の嶺の

高きをそねみかゝるむら雲

篤信なる友の其事業の困難一方ならぬをも神に任せて憂へず
勇敢なる歌詠みて給ひけるにかへして

よしさらば立つも倒るもみ守りの

神にまかする身こそ安けれ

本間氏の來らるを待ちわびて

友を待つ身には短かき秋の日も

久しどのみに暮らしかねつも

長門より相川氏まだきに訪はれ神の恵みを語らふ内朝日昇り
ければ

さしのぼる旭のそれにいやまさる

恵みの光何とたへむ

語らひつゝ互ひの名によせてよむ

もろ共にかはらぬ恵み語りあひ

語る心に愛ぞあふるゝ

山の端をおほふむら雲晴れにしも
霜浦氏盲目の身にありて猶人を導かるゝを感じて

浦吹く風の方なりけり

久しくこの地に在りし人長門の國にかへりければ

知るや君朝東風吹かぬ日さへなほ

湊川風たへでかよふを

別

なかくにけふ立ち別る夏衣

軽きも重き四つの袖かな

秋のわがれ

秋風の身に泌みわたる別れ道

尾花にあらぬ袖の露けき

ことわりや鐘のひびきも沈むなり

友とわかるゝ秋の夕暮

別れなば何時あふ阪の關こえて

逢ふにあはれぬ身こそ悲しき

うべしこそ君と別るゝ秋なれば

包むにあまゐるわが袖のつゆ

大擧傳道のありしころ空に彗星あらはる此星一名豊年星と云ふと聞きて

天の空豊年星はあらはれぬ

たり穂の秋もやがて來ぬべし

信仰あつき友より高尾の紅葉を受けて

天を望む心高尾の花紅葉

赤きは君が心とも見む

クリスマス

クリスマスたとへがたなき樂しさに

ま心よりや出づる讚美歌

萬世に榮ゆる君をことばきて

歌ふもたのし今日のいはひ日

祝ひ日やみ前にきよく讚美せん

うたへどつきぬ神の御惠

クリスマス夕教會へつごほんとしてゆく途上空にかゞやく
星を仰ぎユダヤの昔しを偲びつゝ

クリスマス宮にゆくさをかゞやける

星仰ぐこそまつたふとけれ

又清けき月を見て主の榮光をふもふ

むら雲のまぎれもなくて天地を

隈なくてらす冬の夜の月

わが病の藥にこそ夢野の里に棕櫚の葉をさぐる友の心を

人はまだ夢野の里の朝霜を

ふみても友の藥たづねん

そのかへし

薬にと折りて賜ひし棕櫚の葉の

青きもあかき君がま心

新年救世軍

新らしき年の初日にかゞやける

靈 鶴

血と火の旗の影ぞ勇まし

その兵士どもへ

矢玉にもおもてをむけて進めかし

されど十字架は何時も背に負へ

自由傳道の盛ならん事を祈りて村田氏へ

麥畑の中に育てと生ひ立ちて

雲井はるかになく雲雀かな

一姉妹の遠方へ行かるゝとき

旅衣かすみと共にたつ友を

おほひとゞめよ四方の山の端

さる兄弟と別れに

秋空のあはれもいかで及ぶべき

君と別れのこの春の夕

洋行せんとする人に

うな原や波路はるかにゆく君を

心千鳥となりて送らむ

伊豫の今治に赴かれし一姉妹に

海原や浪路はるかに伊豫の國

今はるゝとおとづれやせむ

淡路に歸國せられし一老姉に

別れてもいつか淡路の島千鳥

翼をのぶる時を待たなむ

越路の或教會にて救はれし人を祝ひて

けはしかる罪の山路を越路がた

靈 鶴

雪より白く成るぞうれしき

四屋にて悔改めし人のもこへ

あなたふと暗きひと屋の中にさへ

恵みの光てらす思へば

同氏を思ひて

かいまみし隣の庭のおそ櫻

葉がくれに咲く一よゆかしき

野末の花さ名のる人への書面のかへし

病みふして歩み得ぬ身に思ひきや

野末に咲ける花を見んとは

小兒に教への本を贈らんこて

幼な兒の小さき歩みもエス君の

御あしの跡をふみてすゝめよ

本問氏に久々あひたる心情をよめる

楽しども楽しかりけれ待ちわびし

友と語らふわが心こそ

我友とつきぬ話しに更かす夜は

秋どしいへどさても短かき

今宵しも神のみ恵み語りあひて

ねなば夢にも聖國たどらめ

語るうちにも主にある同胞の心の樂園の思ひして

天小舟神のみ子等樂遊び

波風あらし世を下に見て

若松よりわざく尋ね給はりし一老姉の妾に逢ひしを國のつ

とにせんぞ申されしに耻ぢ入りつゝ
はえもなき湊川原の朽木をば

猶若松のつとにせんとは

亦病友の寫眞をいたゞきて

まづ君にあひつる今日は千代の春

たゞひと聲も聞かまほしけれ

北海道なる兄弟のもこへ

隔つれど心の愛の通ひなば

千里もいかで遠きものは

さる人におくる

み救の光りは見えぬ目にも見ゆ

見ゆる目ありて見えぬものは

奥江氏に會ふ

久々に語るも聞くもみめぐみど

思へば口に出づる讚美歌

病める友の元氣づきしを喜びて

しをれたる望の花をなげさしか

今日の笑顔を見るぞ嬉れしき

未見の友を慕ひて

なつかしく思ふ心ぞます鏡

うつりて見ゆる君がおもかけ

出征の友と別るゝ時

つきはてぬ名残をたゞの一言に

いひかはしつゝ別れけるかな

出征軍人におくる

こと國のあさちが露をふみしだき

錦かざりてかへれわが友

救世軍の友への送別に

どいまるも行くもかへるも我ならず

行かしめ給ふ神の御こゝろ

わが拙なき病みふして歩めざる身のうれしさよ云々を讀み病みふして道に迷はぬ君なればおのが旅路の友とたのまんこよみて給ひけるかへし

病みふして歩み得ぬ身のいかにして

君が足並に合はせ得べしや

さる友に逢ひける時又の病友の淋しからんを思ひ浮べて

楽しくも語りあふ身に引かへて

淋しく暮らす友や如何ならん

わが病のおこたりを待つこの歌を賜はりける友へのかへし

聖國にて受けん恵みにくらべては

十年もかりのいたつきにこそ

癒えん日を待つてふ君が言の葉を

歩み得ぬ身の杖とたのまむ

慰問袋を贈りける時

大いなる君のいさほし慰むる

小さき袋の如何に幸なる

其禮状のかへしに

小田卷のいとなつかしくくりかへす

ふみにも君が痛手をぞ思ふ

○瑞 ○

聖書の上に蜘蛛の止まり居るに

聖言を心にかたく結べどや

みふみの上のさゝがにの糸

望月の澄みわたりし夜病床より

病みふして仰ぎ見がたき月ながら

洩るゝ光にすむ心かな

訝やかに今宵の月の清きかな

己が心もかこそありたき

家内のもの皆出て行きてひこり留守せる時

たゞひとりるすぬし居れば宵ながら

寂びしとぞ聞く虫の聲

我家の裏なる人花桐を折りて給ひければ

手折りこしその一もとを美はしみ

ながめてあかずよ床の花桐

幼年の頃通ひし夜學會の事を思ひ出て

夜なくに通ふ學びの道遠み

手さきも凍る冬の夜嵐

鳥取なるサンシヤ員にて十二三の御令嬢達の一團よりクリスマスの祝にきて縋紗の小切を繼ぎ綿ふくやかに入れし夜具を贈り給ひし時錦のしきれにもましてうれしかりければ

あたくさしとね嬉れしや賜ひてし

人のなさけのこもると思へば

わが病友の遠方より薬を送り越されければ

心こめて送りたまへし神薬の

苦きもあまき愛の蜜かな

五十四

岡田御老母様より御羽織を給はりしに

賜ひてしそのま心をさながらに

暖かき衣身にまどはばや

東京菅谷姉より御繻絆を贈り賜はりければ

心こめ賜ひし衣短くも

長くたもため君がみなさけ

感じのまゝを

武藏坊われは望まじ十字架を

負ひてしたかふ力ほしけれ

聖言にうましき味はこまれるを

喰はずさらひの人も多きかな

酒の害

いとつよき正氣を酒にうばはれて

晦日の鬼の恐ろしきかな

月見の宴のさわぎに井鉢を毀ちたりその話しを人傳てにきゝて

望月のまろきに似たる鉢毀し

悲しからずや片われの影

煙草を好める友をいさめて

何をおきて君が好めるわすれ草

憂きを忘れて身を忘るとは

病床にお萩餅を受く

お萩餅あづきつけてどまめの子に

成りてくらせと君や給へる

瑞 葩

五十五

手の痛める時人に衣着かへさして貰ひしに手荒らかりければ
心なの野分なるかな細かやの

えたへぬ身とも知るや知らずや

人より無理を言ひかけられて口惜しかりければ

うきことのつもると知らば淡雪と

消ぬべかりける昔しなりしを

自ら勵まして

唯忍べうきは深雪とつもるとも

解くる春こそやがて來らめ

親しき友の欺きけるとき

友われにつれなかるとも我のみは

つれなき友をつれなくはせじ

吾老父の薪炭業を營むとき

空おほふまではなくとも炭竈の

細きけふりのたてつゝけどぞ

まもなく失敗せしとき

如何にせむたのむ木蔭に雨もりて

猶ほ濡れまさる小夜衣かな

亡き母をしのびて

風寒みねぐらはなれし子鳥は

母その森ぞこひしかりける

明治卅六年の夏病床より澄みたる月を僅かに見うたゝ越方を
しのび又今の身の幸福を思ひて

澄む月をうへなきものと思ひけり

月より清きものを知らねば

つれなくも理を非に曲ぐるつむじ風

吹け吹け我はくちなしの花

病床より近所の庭に櫻の咲けるを見て

天つちの神のみその庭櫻

よそに咲くさへ嬉れしども見る

わが家の櫓に燕の巢をかけければ

やさしくも來ぬるものかなつばくらめ

荒れしわが家を宿とたのみて

憂き思ひ慰めにけりつばくらめ

冴ゆる聲音の樂し喜ばし

病める我を慰めんとして人より朝顔の花を見せ給はりければ

朝顔の一朝のみの榮なれど

ふかき心の美はしきかな

五色にして錦の如く美はしきものありければ

ふる里へかへりゆくらん朝顔も

はれの錦をかざりつるかな

林檎を贈られて

ま心をこめておくらす林檎こそ

愛の甘露の味どよき

病床より淺河原の景を見て

春景色眺め長閑けき湊川

松の梢に霞たなびく

藤の花を見て

下るほど其名ぞ高く上るなる

風あらくともたつな藤波

たかぶれる思ひをかへてけふよりは

心を下り藤と咲さめ

巢立たぬ雛雀を人の捕へけるに

わが宿の軒端に鳴くや親雀

巢立たぬ雛の姿見えぬを

友より贈られし櫻の一枝に向ひて

手折つる人ならみそ櫻花

汝をめでます心汲めかし

親しき友より久しくたよりなかりければ

いふせくも湊川邊の草の家に

君がたよりを松の風吹く

枕邊に小供を集めて遊びける時

病みぬればうきこと多しいでや今日

幼な遊びにわが身忘れむ

春雨のそぼふりける日越方をしのびて

春雨に萌ゆる若菜をたのしみし

ころは昔の春の夜の夢

近所の人四方に枝をさしひろげたる小松を持参せられ名をつけてよこ申さるゝにをこがましけれど四方の松さぞ名づくか
くてよみまゐらせける

片枝の松にも千代はありときく

萬代しげれ四方の松が枝

生田神社の祭りの日に

犬の皮剥きて造りし太鼓をば

兎太鼓と呼ぶはいふかし

暑中鎌倉におはす病人にかはりて

きて見れば夏をわする、由井が濱

かゝる景色を友はしら波

月影に上総の沖のはの見える

ながめもあかぬ由井が濱かな

タイムス一百號を祝して

目出度きや言の葉草のいや榮え

一枝に百千果をぞむすべる

東京より來べき人を待ちて

吾妻なる友をまつちの山なれや

けふや明日やと日ぐらしの里

朝東風にたより聞きたや吾妻なる

友の方より吹くとし思へば

また或るとき

白梅の色うつらふな鶯に

とはれぬ程は春はゆくとも

東京なる一老姉より約束の寫眞着く

日ぐらしに待つ甲斐ありて待乳山

見ゆるぞ嬉れし峯の老松

新年早々來らるゝ筈の友の遅ければ

梅の花咲きは初むるも鶯に

訪はれぬ程は春心地せぬ

友に逢ひける嬉れしさのあまり

須磨のあまの焼くや藻汐のからき世に

住みわぶれども見るめうれしき

比江島姉御訪問されし時月代をなして尼の如き姿なりし
狂歌

かたちこそ佛の弟子に似てもゐぬ

心は活ける神のはしため

舊湊川跡を過ぎける時

見るもうや見ては思ひにせきあえぬ

涙しつらき湊川かな

行きかへりかはりしさまを湊川

あはれ昔しを語れ川風

下山手に轉宅せし人に参らせける

うつり住む山手の下のたのもしき

猶のぼりゆけ君が家の運

夫 婦

枯はてゝ落つるも松の二葉かな

一葉を後にのこさゝらまし

良妻はエホバの賜物也

貧しくもよき妻こそは寶なれ

つゞれの錦氣高くも見ゆ

古への路得に代りて

ちるつゆに衣手おもくなりぬるを

落穂の籠のまた軽くして

日露戦争

うらくくと匂ふ朝日にむかひては

しばしも堪へできゆる露かな

出征軍人の友の心を

草枕結ぶ露營の夢のまも

わするべきかはものゝふの道

戦地に在る軍人の勇敢を想ふ

こと國にことなる日々をおくれども

變らぬものは大和魂

御代の太平を祈りて

いくさ船そなへを解きて仇風も

たゝぬ静けき世とならまほし

天長節

すめらぎの御代のかぎりも白菊の
高く香はめ萬づ代の末

新年山

新玉の春の姿はうらゝかに

初日にはへる四方の山かも

異國に春を迎へしますら夫が

祝ひの歌に山や動かん

禁酒

罪にひたる悪魔の水をさけてこそ

天つま清水そゝがるゝなれ

櫻の花をいたゞきて

一ひらも風な散らしそいたつきの

瑞 葩

床を吉野と見つる櫻を

ひとりのみ眺むる床の櫻花

よし幹見ずも何をうらみむ

かゝる團扇の畫に(神に偏見なし)

み空てる光隈なくさゝやけき

萩の露にもやせる月影

○葡萄樹

堺の鈴木翁受洗廿六年の紀念の祝に

廿六とせ受けし恵みはちぬの浦の

いさごの數も猶足らはじな

さる家の日々に榮ゆくをほぎ侍りて

年々に枝葉繁りて大神の

五葉の松の榮え久しき

碓氷會堂苔の會員諸君を

恵まると蒼開きて初花の

香りぞ高く世に匂ふべき

原市教會少年會諸君を

大神の恵みの露の撫子は

葡萄樹

赤き心の花や咲くらん

磐上教會へ贈りける

み救の磐をもとゐのみやしるは

ゆるがす朽ちず世々に榮えん

同じく其地方の人情極めてよからぬ中に建てられたれば

雨風のあらし中にも御恵みの

光りかゝやく磐の上の宮

孤兒院なる愛する弟妹を思ひて

大神の恵みに育つ梅の花

ひらけば高く香り匂はめ

タルカット師に活花を頂きて

手折こし君が心の花うばら

われはめでましうつらふるとも

同病の友の爲嘆きける折柄コザト師に花薔薇をいただきて

花うばら香れる君がま心に

どぢし心もひらきそめにし

霜浦氏の御結婚を祝ひて

冬空も緑の色をあらためて

連理の松の契り深しも

主にある兄弟の結婚をこまほきてよめる

俱白髪年波いかに寄するとも

いかでひるまん信仰の道

高砂のうたひにまさるたゝへ歌

鶴龜よりも相愛の二字

妹と背を祝ふ檐端のむら雀

八千代となふるこゑぞめでたき

相澤夫人の女子を擧げさせ給へりと聞きて

御恵みもふかき緑の松が枝に

初音わけにし千代のひなづる

西内氏の男兒をあげさせられし時

天つ父のおほひ給はす袖垣に

かをり放てよ大和撫子

原夫人男子安産の御祝に

御園生の小松に千代の色見えて

めぐみの春ぞ長閑けかりける

本間氏方に男兒をあげ給ひけるに

み恵みの露に撫子咲出で

赤き心を世にしめすらん

森本御愛兒に御目もじいたせし時

若草の萌えつるさまのみどり子を

枕べ近く見るぞうれしき

一稚兒を

み恵みや妙へに小松の若生えは

千歳のよはひめでたかるらん

某氏の結婚を祝ひて

睦まじく幾千代までも住の江の

松の操の色はかはらじ

一兄弟をほぎ侍りて

さしのぼる朝日にはひ君が家の

松に千歳の光り見ゆらん

生ひ茂る君がみ園の松が枝に

千代呼ぶ田鶴の聲ぞめでたし

武田氏に寄す

虎の意を逞ましうする竹籜は

千里につゞく御代となるまで

同じく令息敏明の君をうたひ侍りて

ほのくくと恵みの春のとし明けて

うたひそめにし千代の雛鶴

淡路なる一姉妹の許へ

なつかしき君に淡路の島千鳥

友呼ぶこゑも我心かな

病氣全快の人におくる

今は早や病は梨の花盛り

一枝折りてうてためしせむ

中村氏病によりて神を信ぜられければ

うたがひし心の中の村雨は

晴れてすゞしき月を見るかな

又其名一正によせて

むら雲の晴間の月に迷ひなく

一すぢ正ぐの道歩むかな

北海道なる中山兄へ

北風の身に泌むとても厭はじな

葡萄樹

友の方より吹くとし思へば

長田氏へ寄す

聖言のしげき林にわけ入りて

恵みの露は受くべかりけり

正道氏によみておくれる

さまよへる亡びが原の旅人に

正道示す君ぞゆかしき

西内姉へかへし

惜しからじ深山がくれにくつるども

心の花とにはひ残さば

教師久下氏に送らんこて

からし種榮え久しく百千鳥

木の下蔭にとはにやどらむ

大田原氏の扇に染めたる

夏木立しげる梢にみ恵みの

露ぞおかるゝ大田原の里

小堀里子嬢へすゝめの手紙に添えて

細くとも濁らで澄まば里川の

清き流れを人や掬ばむ

一老姉をうたひて

雪ふれどみどりの色を更めぬ

操正しき庭の老松

一兄弟を祝ひて

榮えゆく君がみ園の松が枝に

葡萄樹

千代呼びかはす鶴のもろ聲

越後なる一老兄をうたひて

初雪のつもれる園のくれ竹に

千代の色添ふ春のあけぼの

横山姉をうたひて

山の端を雪かどまがふ横かすみ

たなびきそめし今日の長閑けさ

鹿子木姉を

日影見ぬ深山の谷の白雪も

鹿子まだらにとけやそむらん

伊木姉に寄す

雪霜もいとふ色なき常磐木の

操正しき庭の松が枝

東方姉をよめる

烏婆玉のやみ夜も過ぎて久方の

光さしくる東雲の空

新名姉を

正道をゆけばシオンの山の端に

新らしき名の見ゆべかるらん

西内姉

うるはしう開きそめにし山櫻

家居の内も香ににはふらん

比江島姉を

難波潟芦間にうたふ田鶴が音を

葡萄樹

さくも長閑けし比江島の里

岸本峯子姉に寄す

岸本の松の葉越しにかゝやきて
峯に朝日ののぼるあけぼの

若林氏を

若樿の林に千代の色見えて
あさ日かゝやく春の曙

三谷姉の傳道を

深山路の谷間に梅の花咲て
嶺もふもとも香りぬるかな

藤野氏のみ名に

下るほど名こそ上らめ藤の花

おのが姿と心たがふな

中島氏に

はかりなき恵みの海の中島は
救ひの岩ぞ基なりける

石塚氏に寄す

君が身にたまひし恵み東の間も

わすれで盡せ神の聖業を

小堀そめ子姉をうたひて

いと清き小堀の水に香をこめて

笑みそめにけり梅の初花

川本氏を

川上の松の根もとの小笹原

葡萄樹

吹く春風に梅が香ぞする

梅本姉を

咲そめて匂ふ御園の梅が枝に

聲美はしく鶯の啼く

岡本姉を

岡本の梅の林の咲そめて

かすみにうたふ鶯のこゑ

小田氏を

山里も春はたのしや梅の花

香へる小田に鶯の聲

雪子嬢を

若竹の繁れる園の初雪の

つもりて千代の光見ゆらん

濱田氏をうたひて

濱千鳥うかぶ波間のくれなるは

二見が浦の初日の出かな

横河氏を

豊かにも流れつさせぬ横河や

太平洋に世々そゝぐらむ

森本氏を

春霞たなびく森の松が枝に

千代よぶ田鶴のこゑぞ目出たき

浦木氏を

浦ちかき松の梢に風たえて

葡萄樹

千代よびかへす友づるの聲

奥江潔氏を

大神の潔きめぐみに生ひ立ちて

いや榮えゆく庭の若松

長谷川うた子嬢を

大和路の梅もにはひて長谷川の

きよき流れにうたふ鶯

長谷川の流に千代の色そへて

いや榮えゆく岸の若松

五枝嬢を

春霞たなびく五葉の松が枝に

千代呼ぶ田鶴のこゑぞめでたき

西川氏に寄す

賜ひにし天つまし水かわきつゝ

求むる人にわかつてよや君

出征の友に董を封じ込めて

もろこしの野にも生ふらむ董なれど

たゞふる里の使ども見よ

○四季をりく

望の夜

仰ぎ寐て眺むる空の望の月

おもしろの夜や問ふ人もがな

湊川

湊川むら立つ松の木の間より

もれてぞ見ゆる待宵の月

月前柳

立ちむかふ月を鏡に梳る

姿やさしき糸柳かな

花菖蒲

武夫の鎧の袖に香をとめて

勝利かちのゑがはの花菖蒲かな

蜘蛛

細くとも賤が手わざの芋環に

夜毎にかさむさゝがにの糸

夏月

生ひ茂る芦間はなれてゆく船を

さやかに照らす夏の夜の月

春風

我梅のかをりぬすみし春風は

いづちゆきけん追はましものを

蛙

思ひわびいをねぬ夜半はさやかなる

四季をりく

蛙なく音のものうくもあるかな

立 秋

これよりと思ひ立つ秋今ぞ來ぬ

夏のをこたりいざやかへさん

秋 夜

木の葉ちる音さやかに小夜嵐

身に泌む秋となりにけらしも

秋 夕空

入日影嶺の紅葉に照りそひて

濃き紅や秋の夕空

白 菊

霜枯の頃さへひとり白菊の

咲きはこりたるさまぞゆかしき

望 梅花

病みふしてうちわふる身ぞ梅の花

香をだに送れ風にたぐへて

御題 巖上松

あらがねの土ならなく巖にも

千代常磐木の松ぞしげれる

歸 雁

仇にちる花に心をどめじと

思ひたちてもかへる雁かな

菊 畑

菊畑の花の色香のゆかしさに

四季をりく

すぎかてに見る蝶ならぬ身も

かざしの萩

草刈りて畑道歸る少女子の

かざしにさせる糸萩の花

初冬

佐保姫が織りなす錦たがためと

見るまに早も冬の來にけり

春月

行きくれて辿る山路のひとり旅

友とたのめる春の夜の月

朝顔

あはれにも咲けるものかな草の家の

破れし垣根に朝顔の花

五月雨

いにしへの會我のはまれを今もなほ

思ひめぐらす五月雨の夜半

蟬

風そよぐ桐の梢にけふも亦

ひねもすもなく蟬の聲く

時鳥

いづ方へ鳴きやゆくらむほどゝぎす

聞く人もなき深山路の空

鹿

吹きおろす嵐につれて小男鹿の

四季をりく

啼く音さびしき山下の庵

初 春

初春や笑みそめにける梅が枝に

讚美となふる鶯のこゑ

歸 雁

有明の月おちかゝる岡の上に

かすみがくれに歸る雁がね

深山藤

人跡も絶えし深山の藤の花

誰にゆかりの色や染むらん

蛙

賤の男の草かり歌に聲添えて

背戸の小川に蛙啼くなり

更 衣

時なればやむなくかふる夏衣

春に名残のつきしあらねど

虫

小夜ふけて虫の音高く冴ゆれ共

空はくもれるうす月夜かな

菊

弱さわが心も菊にならひなば

おく露霜もいとはざらなむ

毎夜會下山の方に當りて夜鷹の鳴く聲しげれば

鳴きわたる夜鷹の聲もさやかにて

四季をりく

寐覺むびしき山の下いは

異國夢

ふみも見ぬ異なる國の果までも

何を知るべに夢や通へる

暮 春

ひと年はまた逢はれじと春を惜む

袖に花ちるおばしまの夕

伏屋のあけぼの

俳句の部

俳句

元日や祈禱捧ぐる朝心

元日を黄金に咲くや福壽草

元日や昨日の鬼のゑびす顔

苦水の釣瓶にうつる笑顔かな

いやさきに若水汲むや最合井戸

新年や大海原の朝ぼらけ (御題)

富士形の砲臺にさす初日かな (戦地新年の山)

瑞雲に明けて嬉れしや初日の出

仰ぎ見る神の恵みや今朝の春

お多福の下女が焚いたる雑煮かな

味噌擦りし小僧自慢の雑煮かな

俳句

子も今朝は膝にこぼさぬ雑煮かな
 夢の綱結び止めてむ寶船
 初夢に見し富士の嶺の高さかな
 酒の香に酔へる家毎や松の内 (世の常態)
 巖上の松勇ましや今朝の春 (御題)
 初春に開く笑顔や福壽草 (初春聖書を讀む)

春寒き夜延仕事や指の先
 山の端の霞のはてや一つ松
 山かすみ衣の裾の花模様
 白梅を手折る野守の娘かな
 撫でゝやる猫の背暖し梅の花

すうと出る若木可愛き野梅哉
 梅咲くや椽の障子に鳥の影
 開きてぞ香ゆかしや梅の花 (讀聖書)
 梅咲くや小窓を洩るゝ茶の煙
 天神の社の塵や梅の花
 風呂敷に若菜の香残るなり
 崖いとふ玉の御手や若菜つみ
 裏戸出て五歩に川ある苦菜かな
 若菜摘む小供あふなし畠の井戸
 若草やどびく野邊の色ましぬ
 若草に牛の寐跡の残りけり
 船宿に出船待つ間や蜆汁

俳句

残りたる者に福とよ蜺汁
つれづれに戸を開けて見る田螺哉
どられじと戸をしめて居る田螺かな
春雨やくらき灯に讀む聖書
春の雨ひとり眼覺に聞く夜哉
春雨や畑の道ゆく豆腐賣
春雨や昔を忍ぶ尼もあらん
春雨や道者に狭き籠り堂
初午に塗り直したる烏居かな
初午の太鼓につとふ小供かな
數入の小僧元氣や寅の歲
花賣の戸毎に廻る彼岸かな

名も知らぬ小鳥囀づる彌生かな
長閑さや百鳥うたふ田圃道
鳥の音にうかれ心や四方の春
春旅や花の香を吹く三度笠
唯ひとり暮らしかねたる日永かな
聲かざり雲井の空や揚雲雀
世の罪を天に告ぐらん揚雲雀
花に酔ふうき世の上の揚雲雀
歸る雁土産の花も無かるらん
一聲は花に残すか歸る雁
かへる雁春の月には心無し
桃咲て心長閑けき柳かな

俳句

六
櫻咲く枝や嵐の禁制札
片袖に散るや山路の花吹雪
とざしたる障子にかゝる落花かな
行厨を大事にさげし花見かな
短冊に添えてやらばや土筆
立石に樂書したき土筆かな
背の君は何處にますやさいたづま
足元に蟹這ひよるや汐干狩
貝一つ子が奪ひ合ふ汐干かな
手始めや聲始めなる茶摘み唄
ふらこゝや斜に動く跛の子
破蚊帳のつゞくり忙はし春の暮

夢見草とは青春の人の上 (夢見草)

新世帯青き疊や簞

泉水の金魚ながむる暑さ哉

姑を嫁が燻べる蚊やりかな

蚊遣火は消えて書生の大氣焰

疊の目顔に残るや晝寢起

夕立や向ふの里は土用干

音頭取の聲嘎らしたる踊りかな

望の夜は秋風ながら端居かな

按摩笛身に泌みわたる夜寒哉

蔓きれて棚から轉ぶ糸瓜かな (悼)

俳句

主人病みて菊の花咲く庭さびし
 山鴉飛び行く先や柿赤し
 蕭條と葉なき立木や秋の暮
 庭の面に箒目絶えぬ秋の暮
 頬こけし父の寝顔や肌寒し (病める父を見て)
 夜は更けぬ人静まりて虫の聲 (全快を祈りて)
 誰來る垣根の虫は鳴きやみぬ (神わが祈をきゝたまへり)

初冬の夕日わびしや炭團賣
 初冬を掻まく庭の蘇鉄かな
 飼猫と日南ぼつこの小春かな
 木の枝に羽織忘れし小春かな
 田の畔に狐寐て居る小春かな

朝霜をふみて女の大根賣
 下駄の音絶えて霜夜の月白し
 蕎麥賣の辻に荷下す霜夜哉
 冴え渡る月や霜夜の並薨
 菊枯れてかりに小松の床の主
 菊枯れて淋しき庭の掃除かな
 落葉して枝振もなき冬木立
 古壘はたく粉炭のはこり哉
 破れ壘火鉢で隠す貧居かな
 おふけなの炬燵に征士思ふ夜や
 寒月に遠征の士を偲ふかな
 四方山は綿帽子さる寒さかな
 寒江に夜舟の櫂聲凍るなり

朝日してくづそれむるや雪達磨
 取りおろす布袋に似たり煤拂
 居こもりの蜘蛛にげ出すや煤拂
 煤拂病みたる人の置きどころ
 怠れる身にも忙はしや年の暮
 年暮るゝ頃や夜鍛冶の槌の音
 年の瀬を渡らで越ゆるすべもがな
 身に泌むは靈の風かクリスマス
 満洲や清水凍つて仕舞ひけり (清水少尉の戦死を)
 春待つと指折りて子の餘念なき

伏屋の曙終



明治三十九年十月廿六日印刷
 明治三十九年十一月一日發行

伏屋の曙奥附
 定價四拾圓

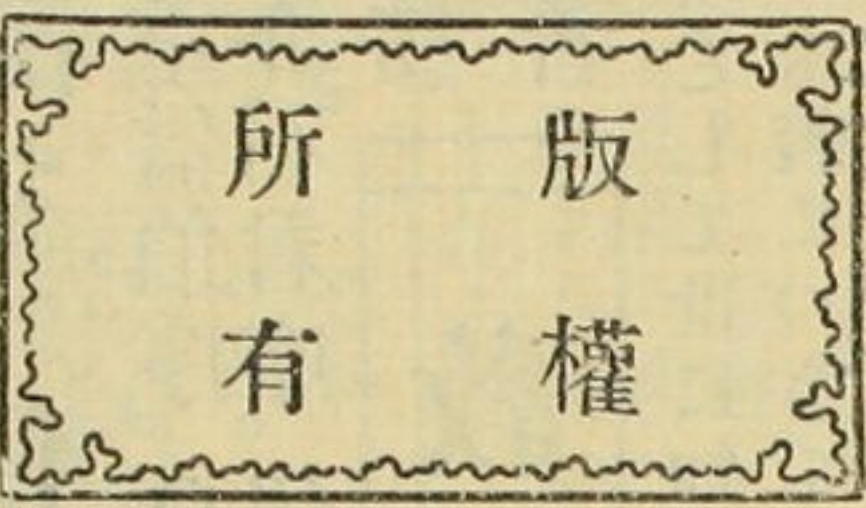
著者 座古愛子

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
 福永文之助 電話一五八七

印刷者 神戸市葺合町二千〇四十六番屋敷
 菅間徳次郎

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
 警醒社書店 電話一五八七

印刷所 神戸市元町一丁目二十四番屋敷
 福音印刷合資會社 神戸支店



賣捌 大阪、神戸、福音社、京都聖書房

中村春
雨君著

人の母

定價 五十錢
郵税 六錢

穩健なる着想、靈妙なる筆力、運命に掀翻せ、**暗涙の中**に燃灼、**光明**と認む、篤き**信仰**と、**同情**に慰められんとする者は本書を讀め。一部の

大隈重信伯序。島田三郎君序。
松村介石君序。伊澤修二君序。

酒井勝
軍君著

教育と音楽

定價 三十六錢
郵税 六錢

音楽者として世に知られたる著者は茲に始めて其の抱負の一端を公表せられたり先づ教育の本義につきては極めて痛快斬新なる説明を試み次に音楽の本義に及びては革命的の大定義を下し更に進んで教育を普通及特別に二分し又之を細別して一々音楽との關係を明示したる實に近來得難きの好著にして教育家、音楽家は勿論其の他苟も新智識によりて社會に活動せんとする人士は必ず一讀せざるべからざるのみならず卷末「婦人と音楽」なる附録に到りては文明的婦人の正さに深慮すべきの大文字。

發兌

東京市京橋區
尾張町二丁目

(振替 貯金)
口座五五三番

警 醒 社 書 店

德富健次郎著

巡禮紀行

寫眞版數十枚入
菊半裁約四百五十頁
クロース製美本
定價 金八十錢

此は著者今春思立つ由の聖地に**基督の昔**を偲び露**巨人**トルストイ翁を訪ふて歸りぬ。百二十日、舟車六千里の行程、境を越えてこゝに本書を成しぬ。卷中多く著者の携へ歸れる旅するの興あらんか。
寫眞版を挿む。本文と相待つて、一讀、著者と共に**西亞東歐**を

吾家の歴史

定價 折皮 八十五錢
郵税 六錢

吾家の歴史は、往來、爲事、得たる思想、社會の出來事、**雜事**の諸欄に、**詩歌**と、**格言**と、**歴史**上の事實を記す。趣味参考頗ぶる至れり、**結婚**、**誕生**、**家眷**、**歴史**上の事實を記す。趣味参考頗ぶる至れり、**結婚**、**誕生**、**家眷**、**歴史**上の事實を記す。なる蓋し稀に見る處の日記簿なり。
發兌 東京市京橋區
尾張町二丁目
(振替 貯金)
口座五五三番
警 醒 社 書 店

原 忠美君著
● 神人合一
 定價 四十五錢
 郵稅 六錢

目次
 第一章 神人合一の順序
 第二章 神人合一の實際的基礎
 第三章 神人合一の結果
 第四章 神人合一の天啓
 第五章 神人合一の祈禱
 第六章 神人合一の病氣
 第七章 神人合一の死
 第八章 神人合一の復活
 第九章 神人合一の神學
 第十章 神人合一の神學
 第十一章 神人合一の神學
 第十二章 神人合一の神學
 第十三章 神人合一の神學

松村介石序 倉長巍著
● 人生の慰藉
 定價 廿五錢
 郵稅 四錢

武本喜代藏著
● 病牀の慰
 定價 三十錢
 郵稅 四錢

高橋卯三郎著
● 家庭閑話
 定價 五十五錢
 郵稅 四錢

每日新聞「家庭」欄
 擔當記者 松山俊著

齊家第一
● 母と主婦
 定價 共二十錢
 郵稅

發行所 東京市京橋區
 尾張町二丁目
 (振替貯金) 口座五五三番

西鎮、中山忠恕、海老名彈正
 內村鑑三、植村正久序
 故德永規矩遺稿
● 逆境の恩寵
 定價 四十錢
 郵稅 八錢

原 忠美著
● 恩惠錄
 定價 廿五錢
 郵稅 四錢

內村鑑三著
● 基督信徒の慰
 定價 廿五錢
 郵稅 六錢

內村鑑三著
● 求安錄
 定價 三十錢
 郵稅 六錢

宮川經輝著
● 靈界の妙趣
 定價 五十錢
 郵稅 四錢

田中太郎譯
● 堅信薄命兒
 定價 三十錢
 郵稅 四錢

警 醒 社 書 店